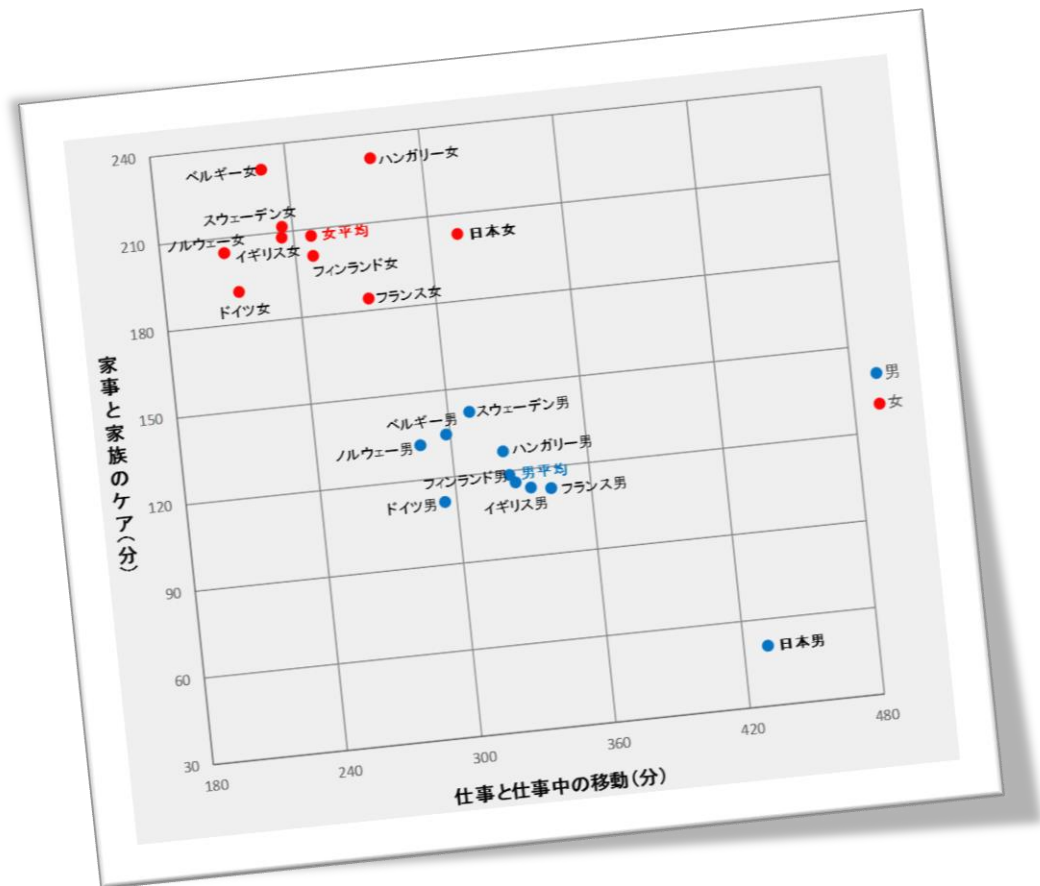


ガールズ講座修了者「TRI 職場体験」の記録 ～シンクタンク人材研修「研究業務支援編」～



※体験チームは、テレワークに関する国際比較研究のフォローアップ作業に取り組みました。統計データから分析する項目・対象を抽出し、比較しやすく加工しました。上のグラフは、作業成果の一部です。各国男女の生活と仕事の関係がよくわかります（詳しくは P.14 参照）

2015年11月

株式会社 ティーアールアイ

目 次

1. 実施概要.....	1
(1) 経緯.....	1
(2) 目標.....	2
(3) 過程.....	3
2. 研究活動の成果.....	6
(1) 作業の結果～有効な分析につながるグラフをつくることができました～.....	6
(2) 結果の考察～データの「読み取り」から「提案」がうまれました～.....	20
(3) チームとしての成果.....	21
3. 職場体験としての成果.....	22
(1) 毎日の日誌より.....	22
(2) 目標達成状況.....	25
(3) 参加者の体験レポート.....	26
(4) フォーラム南太田から参加者へ.....	28
4. 結び.....	30

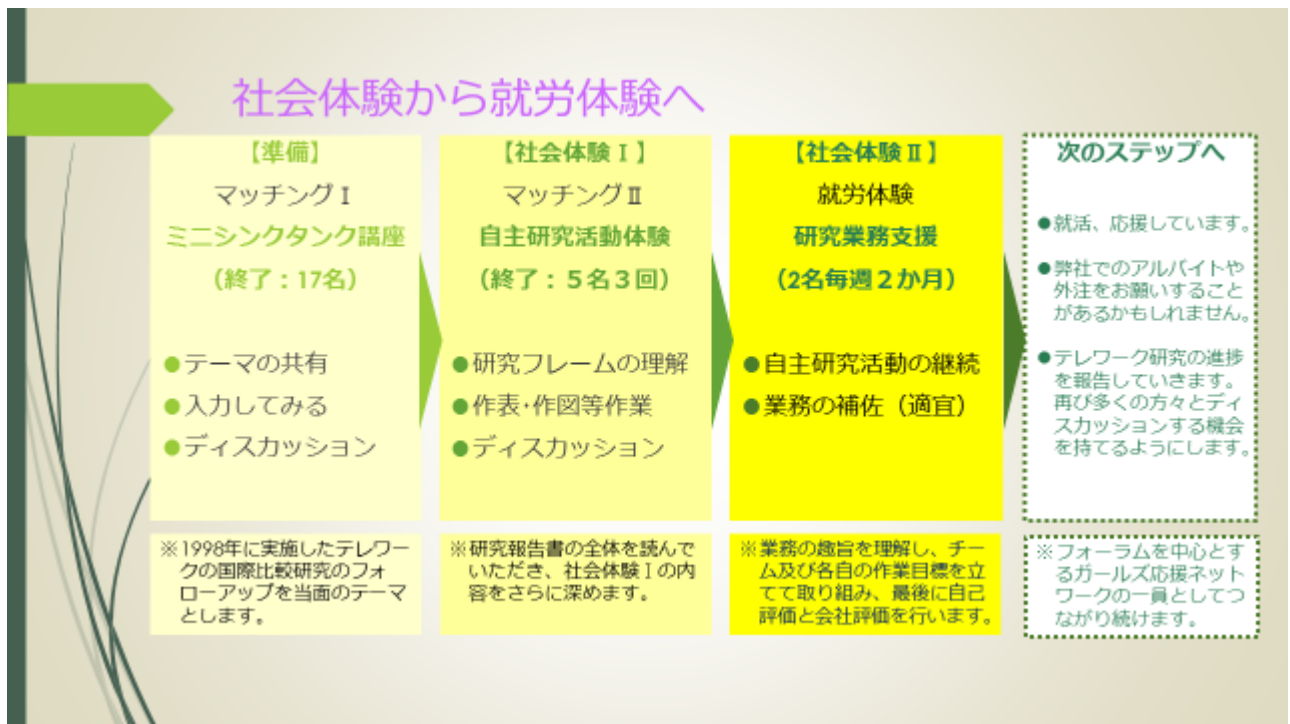
1. 実施概要

(1) 経緯

○「人と地域を育む働き方」を追求することは、株式会社ティーアールアイ（以後「TRI」と記す）の重要な柱の一つです。TRIは今年の夏、若年無業女性（“ガールズ”）就労支援の一環として社会参加体験事業を行う男女共同参画センター横浜南（フォーラム南太田：以後「フォーラム南太田」と記す）と連携し、職場体験事業（シンクタンク人材育成研修）に取り組みました。体験者の募集は、フォーラム南太田が「ガールズ編しごと準備講座（※）」修了生に声掛けしてくださいました。プログラムの内容は、フォーラム南太田の“ガールズ”支援の流れを踏まえ、相談しながら次のように展開しました。

※ガールズ講座（正式名称：ガールズ編しごと準備講座）とは、2009年に横浜市男女共同参画センターが始めた、働くことに困難をかかえるシングルの若年女性（15-39歳）向けに春と秋に開催する11日間の連続講座。若者就労支援の中で、女性に特化したプログラムとして定着。これまでの修了生は約300名。

■人材育成研修プログラムの概要（TRI） ～社会体験から就労体験へ～



※TRI「フォーラム南太田とのコラボレーションによる社会体験=シンクタンク人材研修プログラム（2015年6月）を更新しました。

○プログラムは順調に進み、6～7月の間に【社会体験Ⅰ】を修了しました。その記録は、7月に「ガールズ講座修了者「TRI 職場体験」の記録～シンクタンク人材研修「自主研究活動体験編」～」をアップしましたので、ご覧ください。

→男女共同参画センターホームページ：http://www.women.city.yokohama.jp/girls/girls_tyousa/

→TRI ホームページ：<http://tri2015.jp/index.html>

○この記録は、【社会体験Ⅱ】のようすと成果を記したものです。

(2) 目標

○社会体験Ⅱは、より実際の研究業務に近づけて実施しました。8回の自主研究活動について、TRI（堀越）は、次のような目標を立てました。

- 自主研究活動：テレワーク国際比較調査のフォローアップ（主要指標の国際比較を通じた、柔軟な働き方の成立条件の仮説的整理）をチームで進め、成果をまとめる。
 - ①仮説を立て、検証に必要な作業を設計
 - ・社会体験Ⅰに引き続いてグラフ化を進め、傾向を確認する。
 - ②調査・分析作業の実施
 - ・既存情報の整理と分析を進める。（オリジナル調査は実施せず、既存情報を分析）
 - ・調査結果と今後の研究課題を整理する。
 - ③成果のとりまとめ
- TRIの受託業務を適宜体験し、実際の仕事のさばき方への理解が進められるようにする。
 - ①エクセル入力とグラフ化
 - ②テーマに沿った情報検索
- 以上を、「体験参加者個々のスキルアップ」と「TRI業務の効率化」の双方にむすびつける。

○参加者のプロフィールと、今回の体験の目標は次の通りです。なお、目標は、業務をよりよく遂行していくための目印であり、実際に作業を進める中で検証しながら更新することをよしとしました。下に掲載する目標は、その過程も踏まえて総括したものです。

参加者 A：大学院で研究経験あり（環境科学）、就業経験なし、ボランティア経験あり

- エクセルの並び替え機能等が使えるようにしたい。
- 自分の混沌とした人生を納得できるように将来設計してみたい。
- 作業への参加姿勢について
 - ・意見や感想を適切に相手が快く受け止められるような表現で伝えられるようにしたい。
 - ・たまに集中力が乱れるので、目の前の事に意識をもっていけるようにしたい。

参加者 B：PC関係の取得資格あり（大学では栄養学専攻）、単発アルバイト・ボランティア経験あり

- 数値をデータ化する（自分でゼロから考えて表やグラフに作りあげる）手法を学ぶ。
 - ・勉強と資格取得のための訓練はしてきたが、それをどう作業に役立てるかを実感・実践する。
- 作業への参加姿勢について
 - ・自分から積極的に質問や意見を述べる。
 - ・自分を認めていく訓練をする。

(3) 過程

○8回の自主研究活動の枠組みは、次の通りです。当初、TRI側では、テレワークの自主研究のほかに、現在受託中の業務も適宜体験して仕事のさばき方がわかるようにすることを目標に加えていましたが、週1回3時間ずつという制約の中で、受託業務とタイミングを合わせることができませんでした。しかし、自主研究に集中して段階を踏んだ作業に取り組んだことで、仕事のさばき方の流れを効率よく体験してもらうことができたと考えています。

●作業の準備を整える（第1～2回目）

◇作業の設計：社会体験Ⅰでの作業を通じて、1998年時点から各国のICT活用環境は大きく進展したこと、労働関係の指標に依然南北格差があること、中進国のデータは依然希薄であることなどがわかった。そこで、今回のチームでは、次の方法で比較分析を進めることとした。

- ・対象国を15か国に絞る（1998年の比較と揃える）。
- ・社会体験Ⅰで残された項目のグラフ化を進める。
- ・（項目間の関係を分析するため）必要に応じて散布図等をつくる。
- ・更なる検証が必要な場合は、定性的な分析を加える。

◇作図の準備：作表のフォーマットを整え、3人の分担を決めた（情報関係、労働関係、その他）。

●比較データを整備する（第2～6回目）

◇社会体験Ⅰの成果を活用しながら15か国を対象に比較データを充実していった。**ステップ1**

- ・比較データの選定（テレワーク人口比率、GNP、生活時間、情報化指標に着目）
- ・比較のための編集（値が高い順の並び替え、百分率、人口当たり等の換算、ラベル・目盛り・比較しやすい着色の工夫等）

◇情報の扱いのルール化

- ・分担しての作業となるため、ファイル管理の方法を設定
- ・自宅作業の派生に伴い、データを持ち歩かない等情報保護の認識を共有

●項目間の関係をみる（第5～8回目）

◇意見交換を通じて「生活時間」に着目してみることにした。**ステップ2**

- ・「有業者」男女の「仕事時間」と「家事時間」の関係をみえやすくしてみよう。

◇更に多様な項目間の関係を、散布図を作成して分析してみることにした。**ステップ3**

- ・「仕事時間」「GNP」「専門職比率」「テレワーク人口比率」「インターネット利用率」を組み合わせ、分担して散布図を作成
- ・作成したグラフの編集（XY軸の項目揃え、グラフの大きさ・フォント・色の統一）

●作業結果から考察する（第8回目）

◇グラフを読んで気が付いたことについて意見交換した。

- ・自分や自分の身の周りの事例にあてはめてみるなど、考察を進めた。
- ・テレワーク推進に向けての提案についても意見が出た。

◇社会体験Ⅱの記録とりまとめについて話し合った。

記録を作成（事後の体験レポートを追加）

■これまでの経過（時系列）

時期	実施事項	主な内容
----	------	------

【準備】受入方針の検討～説明会～参加希望者の募集

2015年 4月15日	打ち合わせ (フォーラム南太田担当者の弊社来訪)	○通い方や体験環境の確認 ○TRI 体験の実施方針についての打ち合わせ
4月下旬～ 5月上旬	TRI 体験参加者の募集 (フォーラム南太田より)	○ガールズ講座修了者向けメルマガ、ガールズ講座修了予定者への案内等
5月13日	打ち合わせ (於フォーラム南太田)	○TRI 社会体験の枠組みについて
5月20日	TRI 体験説明会①体験受入の概要 (於フォーラム南太田)	○TRI の業務と社会体験の流れについて (参加者約 20 名、最終希望者 22 名)
5月27日 6月05日	TRI 体験説明会②ミニシンクタンク講座 (於株式会社 TRI)	○テレワーク国際比較研究報告書の一部を素材とするディスカッションと文章入力 (1日2グループ×2日で17名参加)
6月中旬	参加者の決定と連絡 (TRI より)	※年齢・経験・志向性・居住地の遠さ等を考慮し、今回体験者(5名)を決定

【社会体験Ⅰ】自主研究活動体験(週1回13:00～16:00×3回):5名

6月24日	①1998年のテレワーク国際比較報告書 掲載データの確認と入力	○エクセル入力作業 ○最近の統計資料の確認(ウェブ検索)
7月01日	②1998年以降のデータ更新への着手	○基礎的な認識の共有 ○データ更新への着手 ○比較するデータ項目・国の選定
7月08日	③主要指標のグラフ化	○エクセル計算とグラフ作成 →成果物は下の記録に掲載
7月下旬	社会体験Ⅰの記録を作成・公表	※「ガールズ講座修了者「TRI 職場体験」の記録～シンクタンク人材研修「自主研究活動体験編」～」参照

【社会体験Ⅱの準備】

7月15日	打ち合わせ (於フォーラム南太田)	○参加者の決定(本人の希望、めぐカフェ体験との重複を考慮)
7月中下旬	体験受入れシステムの検討(若者就労支援制度の活用等について)	○就労支援機関とのやりとりを通じ、制度を活用しない自社事業としての実施を決定

時期	実施事項	主な内容
----	------	------

【社会体験Ⅱ】業務支援体験（週1回13:00～16:00×8回）：2名

7月22日	①オリエンテーション 作業の設計	○各自の課題意識と目標を確認 ○テレワーク国際比較フォローアップ調査の設計（15か国に絞り社会体験Ⅰの作業を更に進める。） ○体験受入れ手続きについて
7月29日	②準備作業	○ファイル管理のルール化 ○比較の視点の確認、作表上の対象国絞り込み ○分担の決定（情報担当と労働担当）
8月5日	③統計データの確認 作成済グラフの補正	○データ比較の展開（「社会生活基本調査」の生活時間比較表の掲載項目や単位の確認、値の高低による並び替え作業等） ○グラフのラベル・目盛り・比較しやすい着色等の調整
8月19日	④情報保護ルールの説明 散布図作成準備	○自宅作業に向け紙やUSBでデータの持ち運びはしない等 ○比較のための単位揃え作業（百分率、人口当たり等の換算）
8月26日	⑤生活時間に注目した国 際比較分析	○行動別時間分布を「有業者」「全体」の別に帯グラフ ○「家事時間」と「仕事時間」を抽出して散布図作成
9月2日	⑥項目間の関係をみるた めの散布図作成	○仕事時間、専門職比率、テレワーク人口比率、インターネット利用率、GDP成長率、合計特殊出生率等
9月9日	⑦作成済散布図の補正 次回の設計	○比較する項目の精査（GDPは成長率より1人当たり名目GDPの方が安定感あり等） ○とりまとめの方向と次回の計画についてディスカッション
9月16日	⑧散布図の仕上げ 分析（意見交換） 8回のまとめ	○各自作業によるグラフの大きさ・フォント・色の統一 ○グラフから読み取ったこと、感じたことなど ○各自の目標達成状況、報告書の構成など
9月下旬 ～10月	記録のとりまとめなど	○参加者、受入者、フォーラム南太田の振り返り ○ガールズ講座説明会で参加者が体験談を発表（9/24） ○記録とりまとめ・公表

（注）8月頃から、TRIでの作業以外に、自宅で自主的な作業（作表・作図作業の続きや、エクセルの使い方調べ等）が行われるようになりました。また、毎回「振り返り」を作成し、参加者、受入者、フォーラム南太田で共有した。これらは、離れた者同士でプロジェクトを進めるテレワーク（e-collaboration）体験にもなったといえます。

2. 研究活動の成果

(1) 作業の結果～有効な分析につながるグラフをつくることができました～

○作業は、1人1台ずつパソコンを使い、主にエクセルを使った作表・作図を行いました。作業は、次の3段階で実施しました。

ステップ1：比較データの整備（社会体験Ⅰで作成したグラフを加工し、項目ごとに値が高い国順に並び替える作業等）

ステップ2：さらに比較しやすく（有業者男女の仕事時間・家事時間の関係をみえやすくするグラフづくり）

ステップ3：複数の項目間の関係分析（散布図をつくって各国の状況を比較する作業）

○情報源は、主に日本政府が作成している「世界の統計 2015」、「社会生活基本調査」、「テレワーク人口実態調査」等です。これらの統計表では、国ごとに統計の有無、調査の年次や条件が異なっている場合があります。分析時に留意が必要です。参加者は、それも含め、統計には日本及び各国の政策動向が反映されているということを学んでいきました。例えば、経済、情報、エネルギー関係の統計はいずれの国もきめ細かく作られていて直近の状況を比較することができます。生活時間調査は、掲載国が限られており、データも若干古いものになっています。また、テレワークの統計は、欧州では2005年を最後にとられなくなっています。今回の研究では、そのような条件を前提に、主要な指標をピックアップして比較データを整備していきました。

○次ページ以降（P.7～19）に、各ステップにおいて今回の体験チームが作成したグラフを掲載します。各ページは、次の通りの編集となっています。

- ・参加者が作成したグラフをそのまま貼り付け、情報源とした資料名と注書きを添えました。
- ・ステップ1までの作業を通じて北欧各国の特性（※）が注目されたことから、各項目における北欧諸国と日本の位置づけがわかるようにマーキングしました。
- ・吹き出しのコメントは、グラフをみながら都度話し合ったことをレイアウトしたものです。
- ・P.8・15・19の【参考】は、グラフを読み解く際の支援情報として使用・補強したものです。

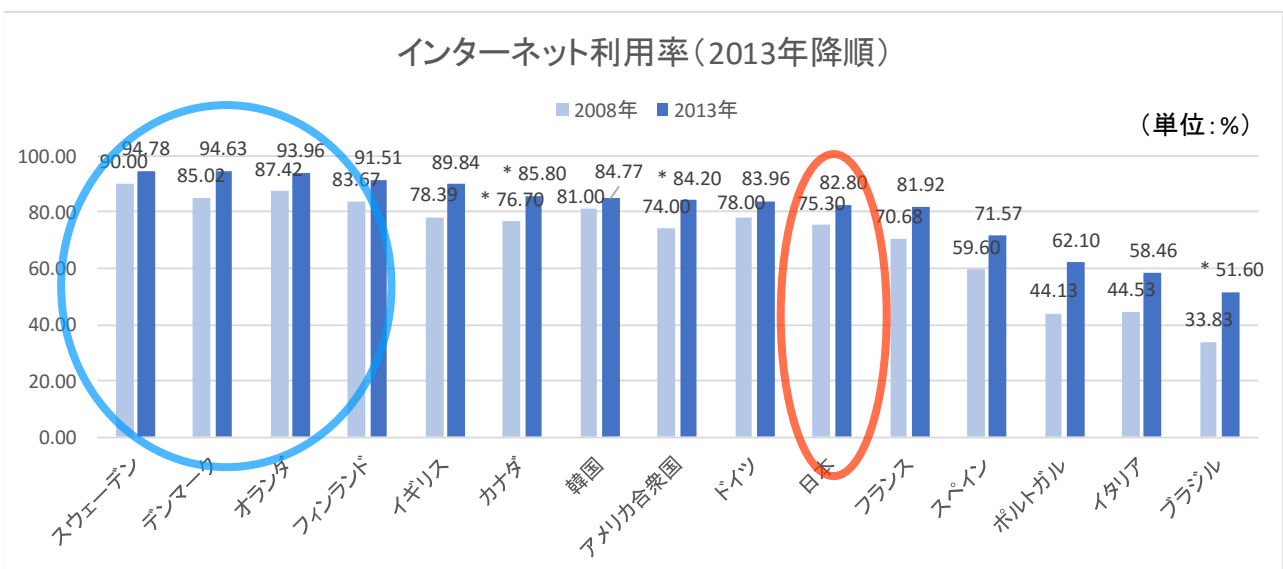
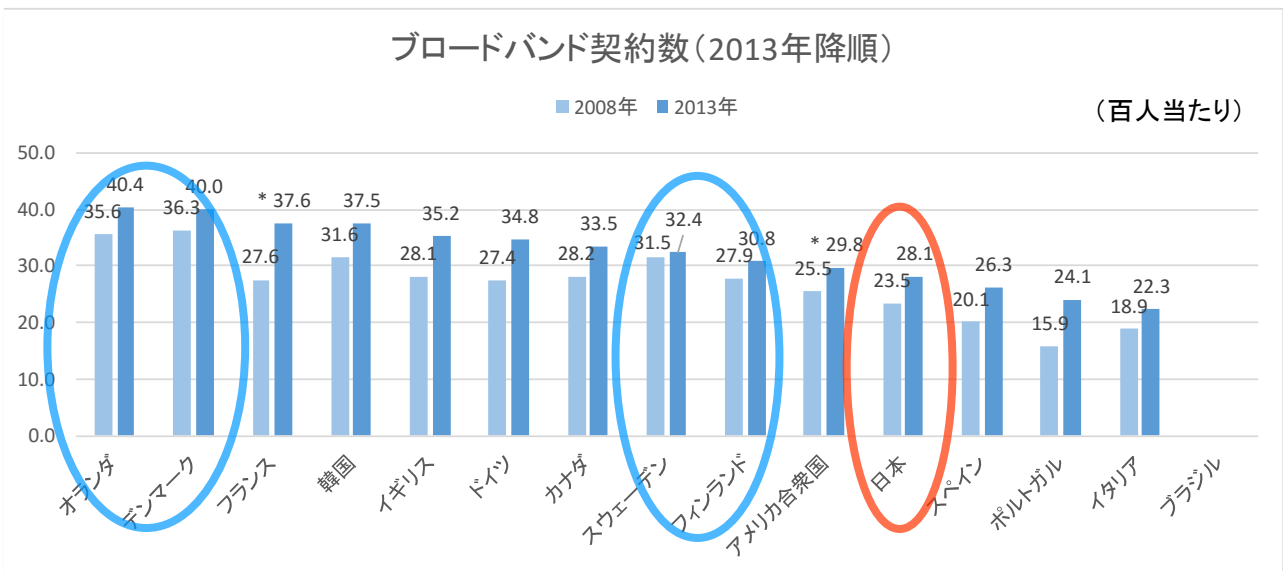
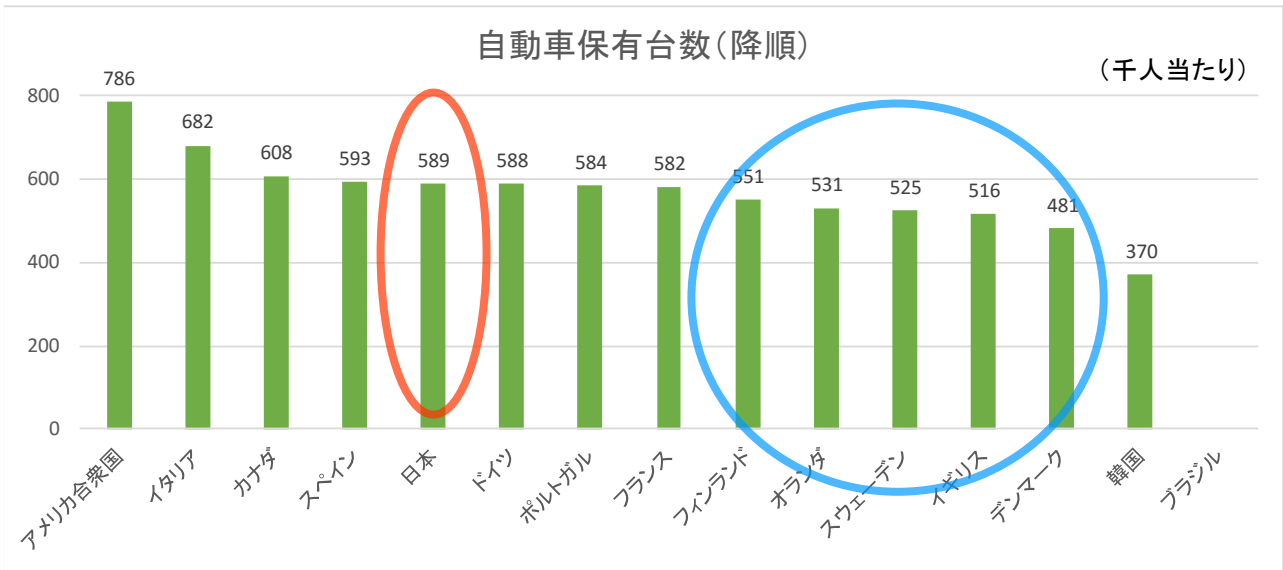
※ステップ1まででみてきた北欧諸国の特性としては、次のようなことがあげられる。

- ・インターネットやモバイル機器利用率が高い。
- ・専門職比率が4割と高い。
- ・テレワーク人口比率が高い（統計がある2005年まで）。

○なお、グラフにより若干色目等が異なるのは、使用したパソコンの機種の違いによるものです。

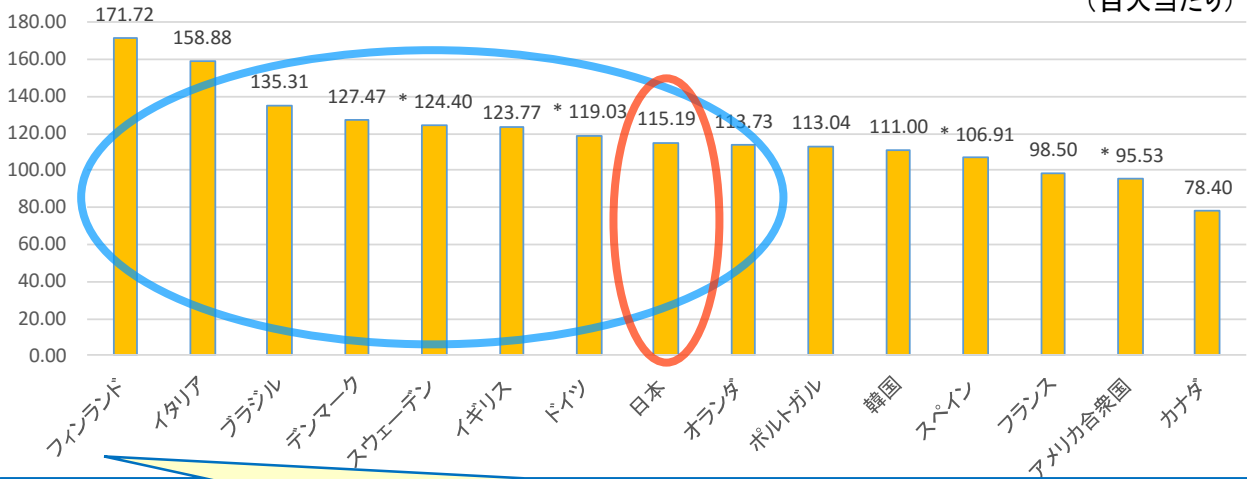
ステップ1：比較データの整備（項目ごとに値が高い国順に並び替えてみました）

社会体験 I で作成したグラフを 15 か国に絞り、比較しやすく編集しよう。数値が高い順に並び替えると傾向がとらえやすい。



携帯電話・携帯電話契約数(2013年降順)

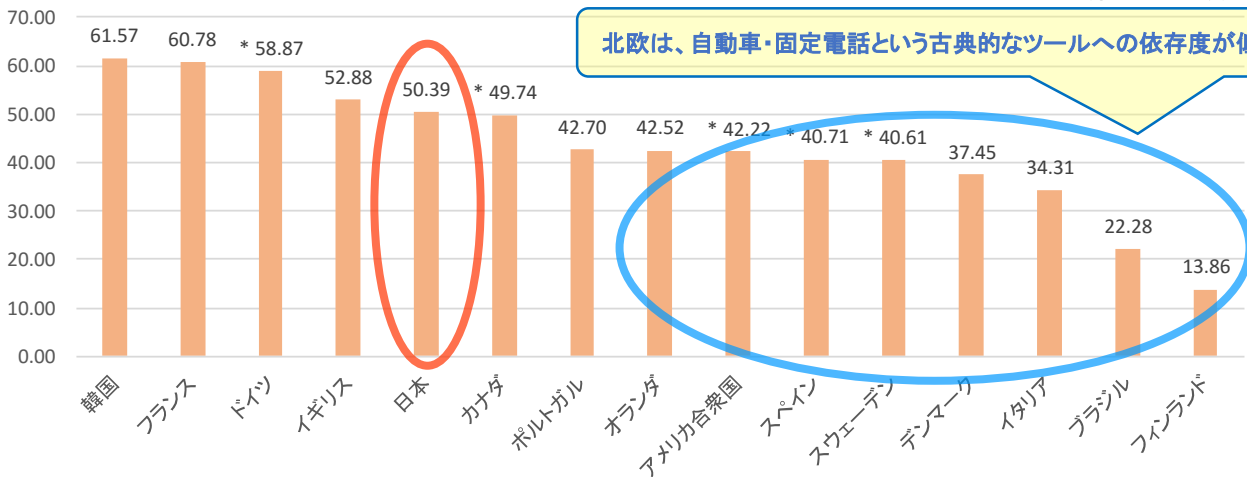
(百人当たり)



作業途中フィンランドのデータの引き間違いが発覚。これは修正後のグラフ。この過程で北欧諸国の特性が明確になった。

電話回線数(2013年降順)

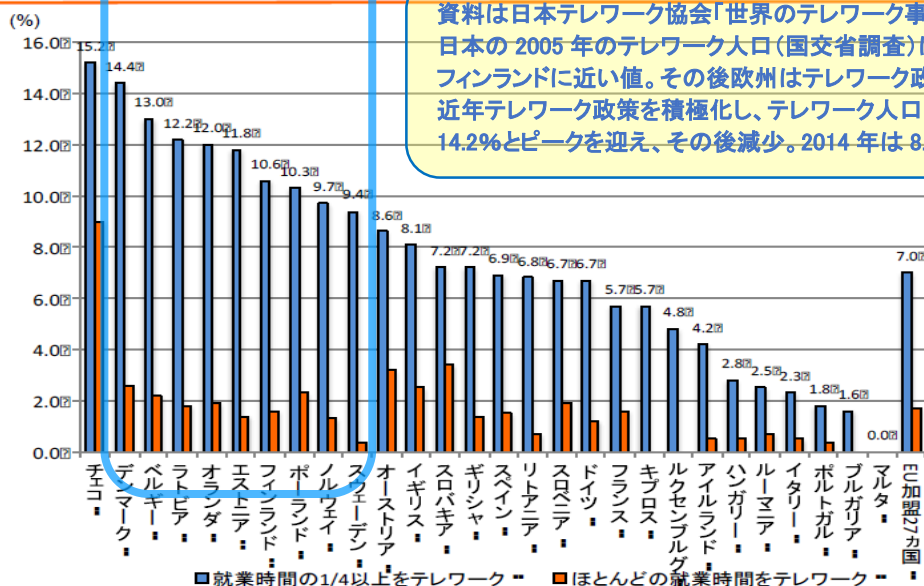
(百人当たり)



北欧は、自動車・固定電話という古典的なツールへの依存度が低い。

【参考】

ヨーロッパのテレワーク人口(EWCS調査2005年)

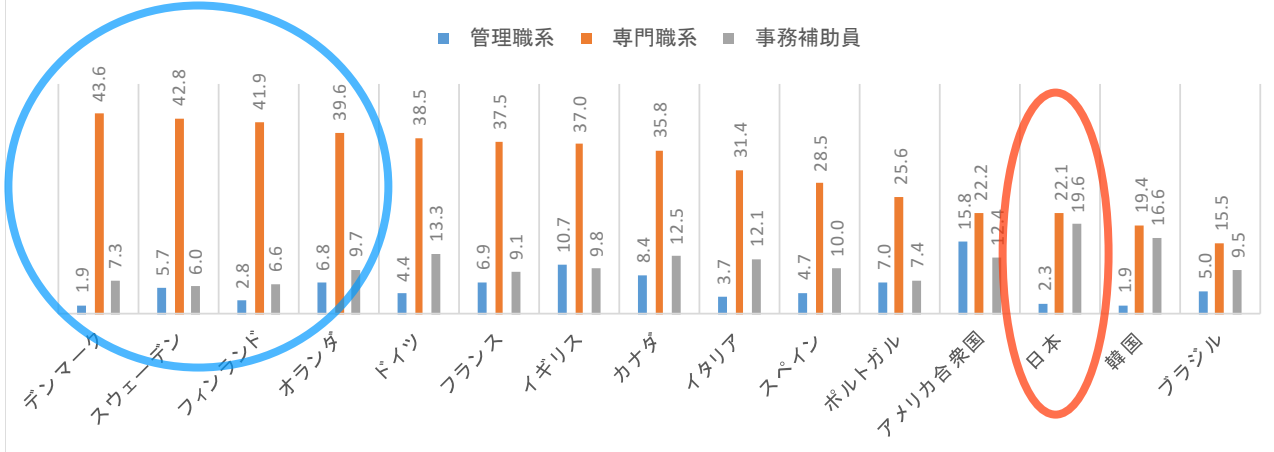


資料は日本テレワーク協会「世界のテレワーク事情」2012年4月。日本の2005年のテレワーク人口(国交省調査)は就業者の10.4%とフィンランドに近い値。その後欧州はテレワーク政策を卒業。日本は近年テレワーク政策を積極化し、テレワーク人口比率は2012年に14.2%とピークを迎え、その後減少。2014年は8.5%。

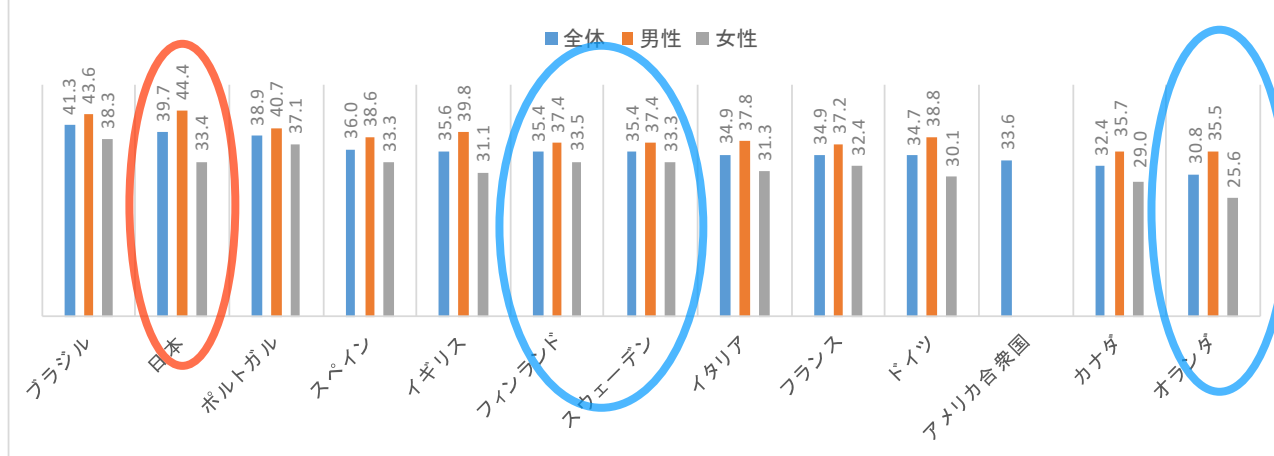
(資料)EWCS(European Working Conditions Surveys, Eurofound)、Fourth European Working Conditions Survey

北欧諸国は、専門職の比率が4割。日本は2割。アメリカ・日本・韓国は2割。この違いを頭に入れておこう。

就業者に占めるデスクワーク系職種の比率(%)

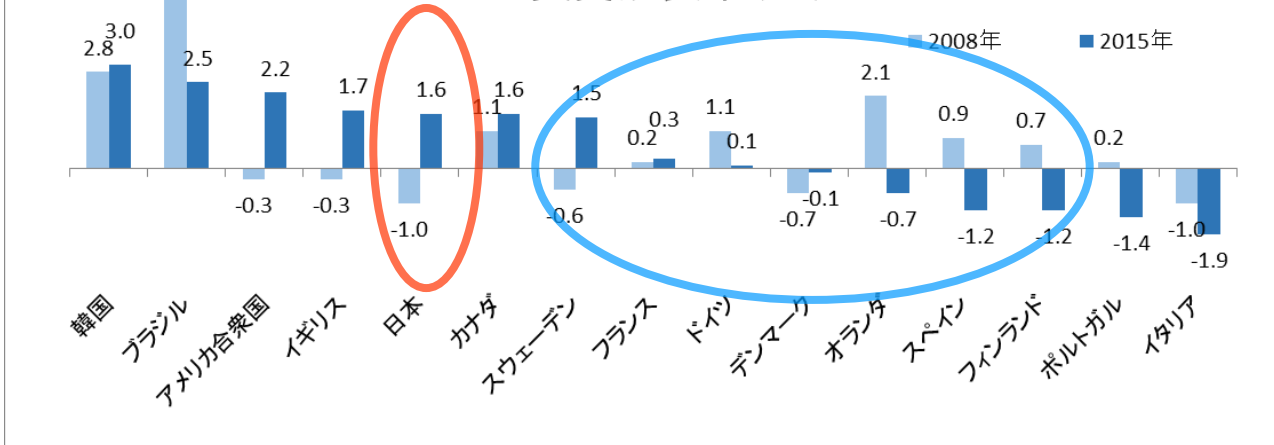


1週間の実労働時間(時間)

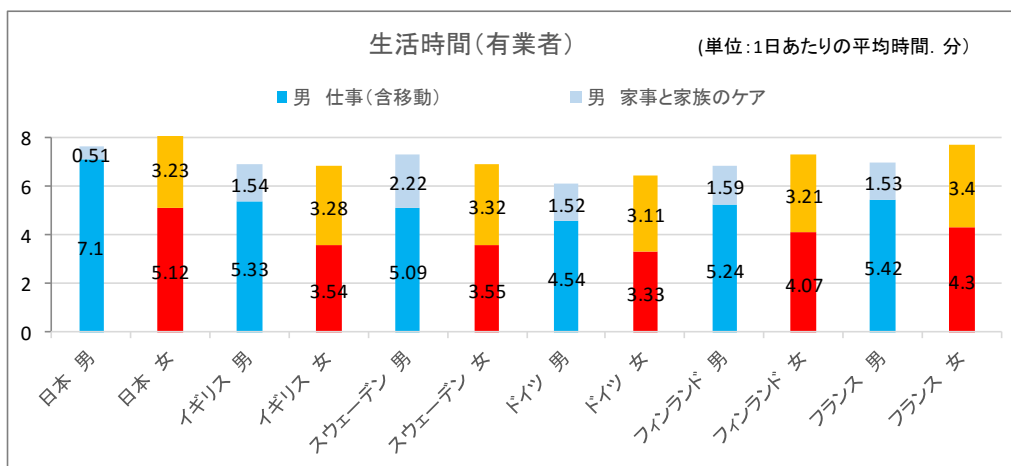
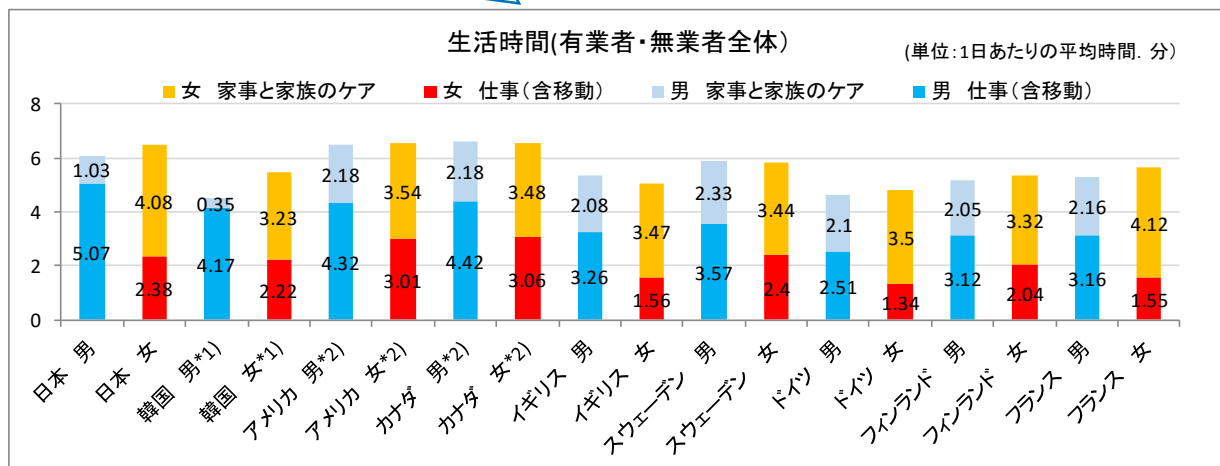


2015年の実質成長率は、新興国>欧米・日本>北欧>南欧。GDPの捉え方は難しい。後で工夫しよう。

GDP実質成長率(%)



「仕事」と「家事」を「男」と「女」別にみてみた。まず、「社会生活基本調査」の時間・分表現がどうなっているのか確認した。Aさんが「●.60」という数値を発見。小数点以下が60進法とすればおかしい。四捨五入でこうなったのかもしれないが、1時間繰り上げることにした。また、2次元の比較となるため棒グラフの表現を工夫した。
 韓国・日本の男女差の著しさと、欧米諸国の家事・仕事バランスの違いが気になる。



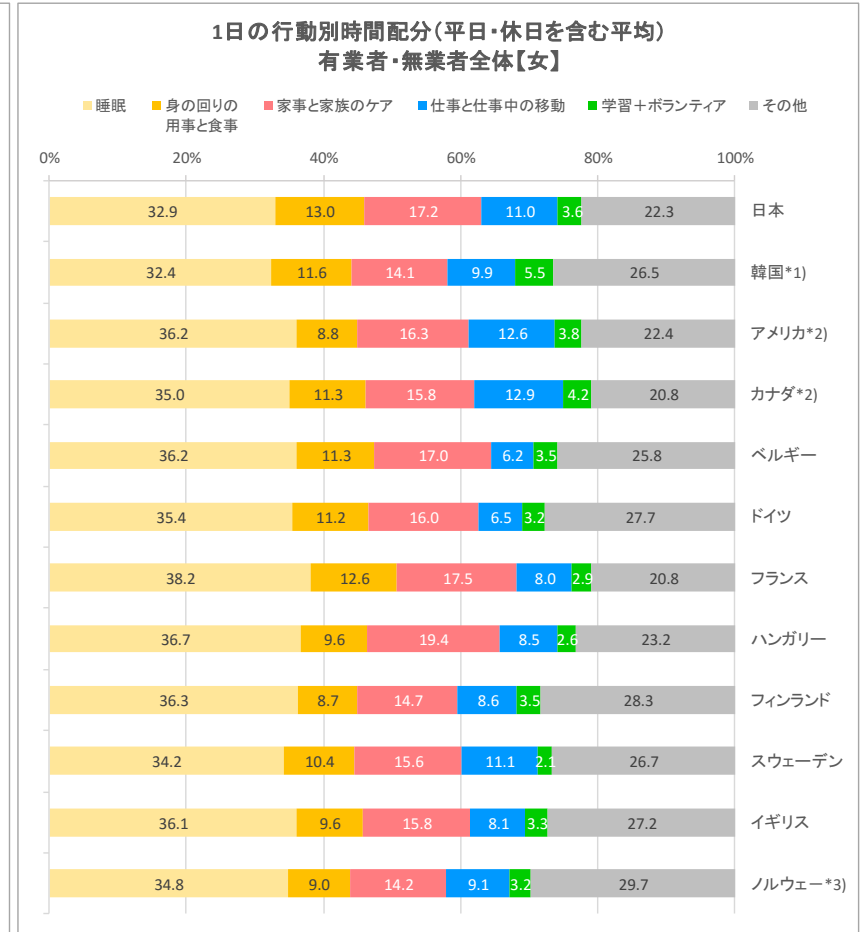
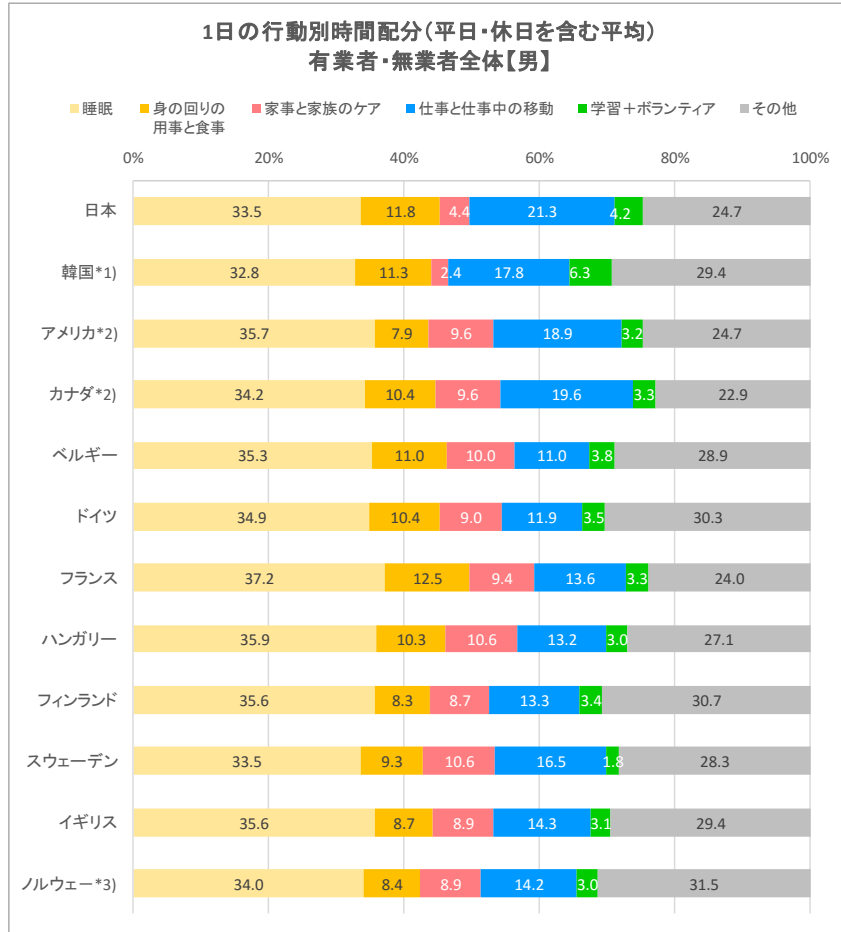
時間の使い方の構造をもう少し分析してみよう

ステップ2：生活時間への着目（有業者の仕事時間・家事時間の関係をみよう）

●行動別時間配分構成

【無職者を含む全体】

男は仕事、女は家事という傾向は各国共通。睡眠時間は男女ともフランスで長く、日本・韓国では短い。自由時間はノルウェー、ドイツ、韓国で長い。しかし、今一つ傾向の比較は明確にできない。



資料：平成 23 年社会生活基本調査（参考）生活時間配分の各国比較

※調査年月は、日本 2006 年 1 月、韓国 2004 年 9 月、アメリカ 2006 年 1～12 月、カナダ 2005 年 1～12 月、ベルギー 1998 年 12～2000 年 2 月、ドイツ 2001 年 4 月～2002 年 4 月、ドイツ 2001 年 4 月～2002 年 4 月、フランス 1998 年 2 月～1999 年 2 月、ハンガリー 1999 年 9 月～2000 年 9 月、フィンランド 1999 年 3 月～2000 年 3 月、スウェーデン 2000 年 10 月～2001 年 9 月、イギリス 2000 年 6 月～2001 年 9 月、ノルウェー 2000 年 2 月～2001 年 2 月。

※対象年齢は、日本・韓国・ドイツ・フィンランド 10 歳以上、アメリカ・カナダ・フランス 15 歳以上、ベルギー 12～95 歳、ハンガリー 15～84 歳、ノルウェー 10～79 歳。

※行動区分は国により定義の相違があるため、比較には注意を要する。*1)買い物は関連する目的の行動に含む。*2)移動は関連する目的の行動に含む。*3)学習は学校での学習のみ。

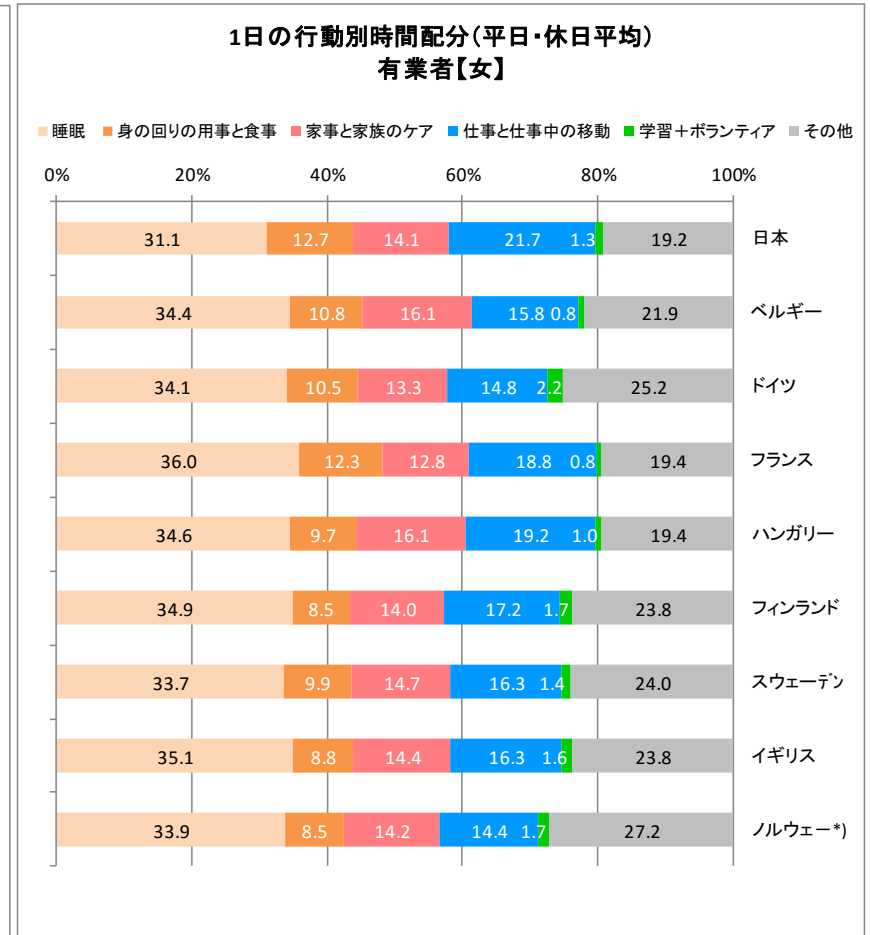
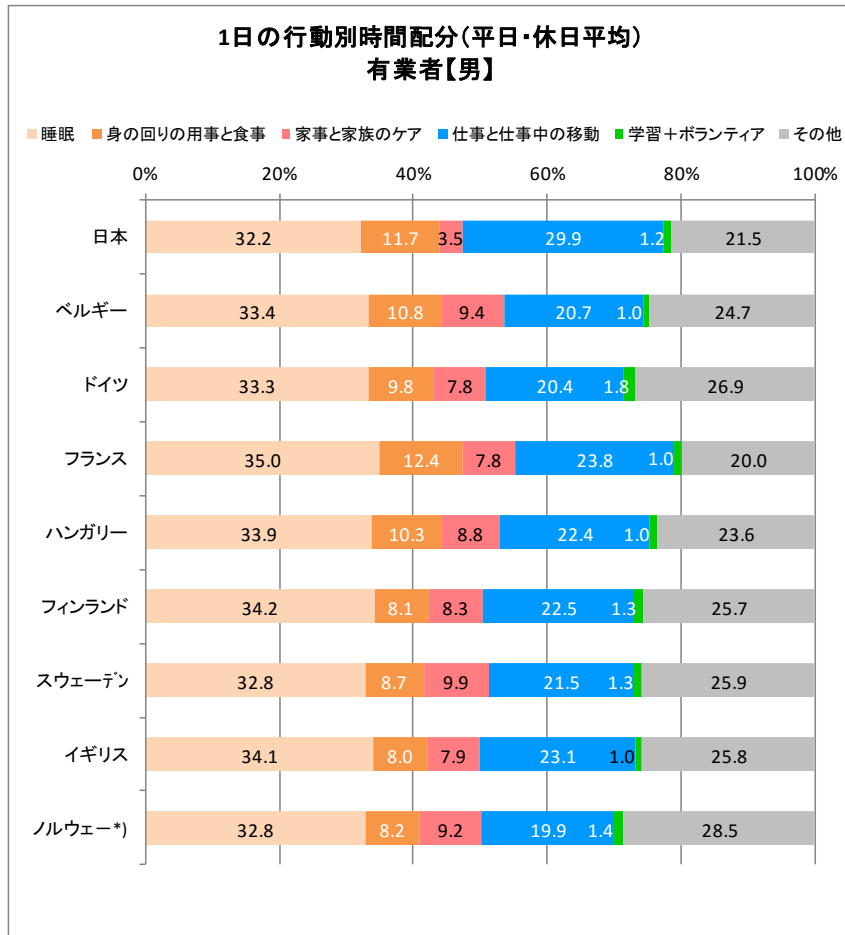
※本グラフは、社会生活基本調査による行動区分をさらに編集している。

●生活時間配分構成

【有業者】

無職者を含む「全体」に比べると当然男女とも仕事時間が長く、学習・ボランティア、自由時間が短い。

また、日本の有職者は欧州各国に比べて男女とも家事と家族のケアの時間が短く、自分の身の回りの用事にかかる時間は長い。



資料：平成 23 年社会生活基本調査（参考）生活時間配分の各国比較

※調査年月は、日本 2006 年 1 月、ベルギー 1998 年 12～2000 年 2 月、ドイツ 2001 年 4 月～2002 年 4 月、ドイツ 2001 年 4 月～2002 年 4 月、フランス 1998 年 2 月～1999 年 2 月、ハンガリー 1999 年 9 月～2000 年 9 月、フィンランド 1999 年 3 月～2000 年 3 月、スウェーデン 2000 年 10 月～2001 年 9 月、イギリス 2000 年 6 月～2001 年 9 月、ノルウェー 2000 年 2 月～2001 年 2 月。

※対象年齢は、日本・ドイツ・フィンランド 10 歳以上、フランス 15 歳以上、ベルギー 12～95 歳、ハンガリー 15～84 歳、ノルウェー 10～79 歳。

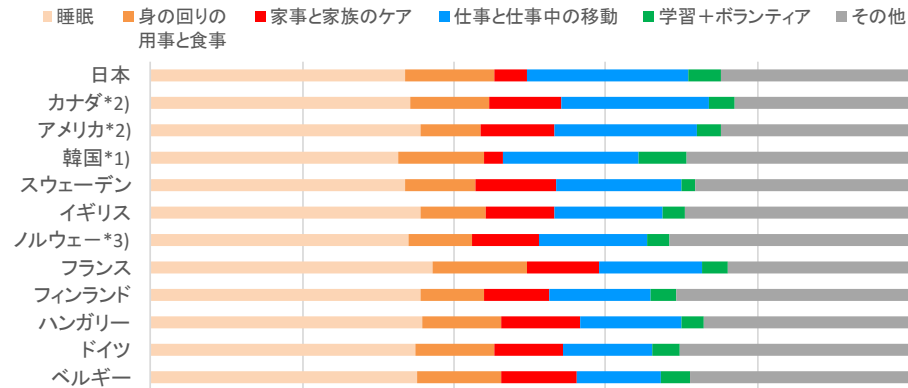
※行動の区分は国により定義の相違があるため、比較には注意を要する。*)学習は学校での学習のみ。

※本グラフは、社会生活基本調査による行動区分をさらに編集している。

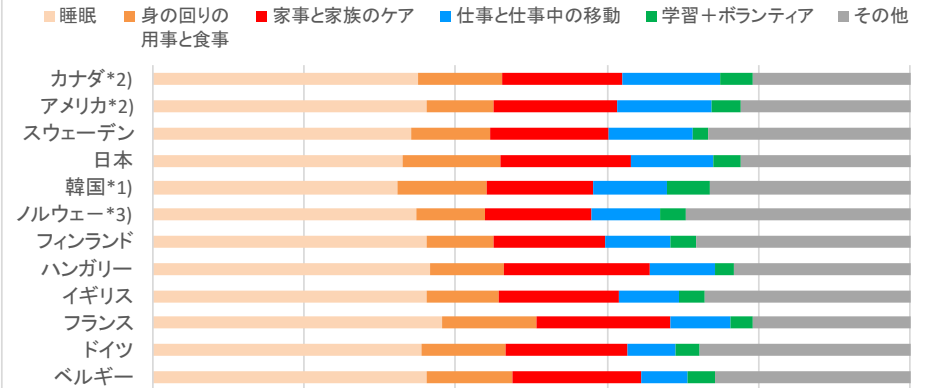
仕事時間が長い順に並び替えて比較すると・・・

男女とも生産性の高い年齢層の傾向を反映し、仕事時間は家事時間(家族のケアを含む)とは正比例、睡眠時間とは反比例の関係があるように見える。他との関係は何ともいえない。

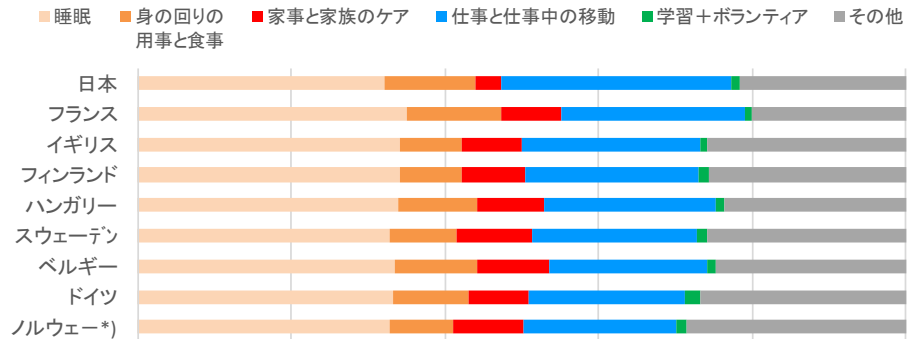
有業者・無業者全体【男】仕事時間の長い順



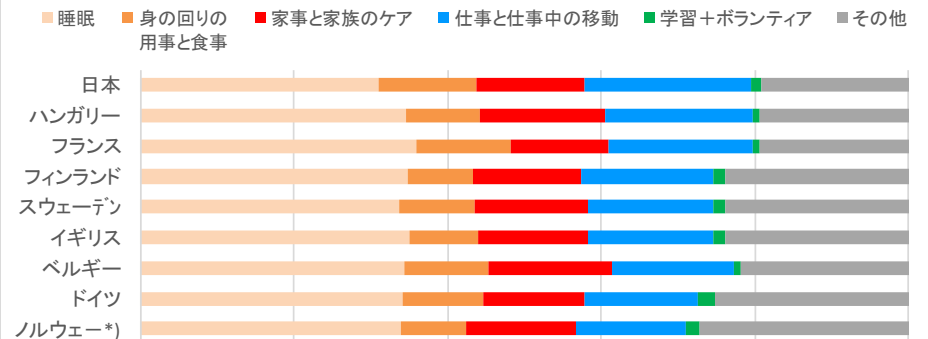
有業者・無業者全体【女】仕事時間の長い順



有業者【男】仕事時間の長い順

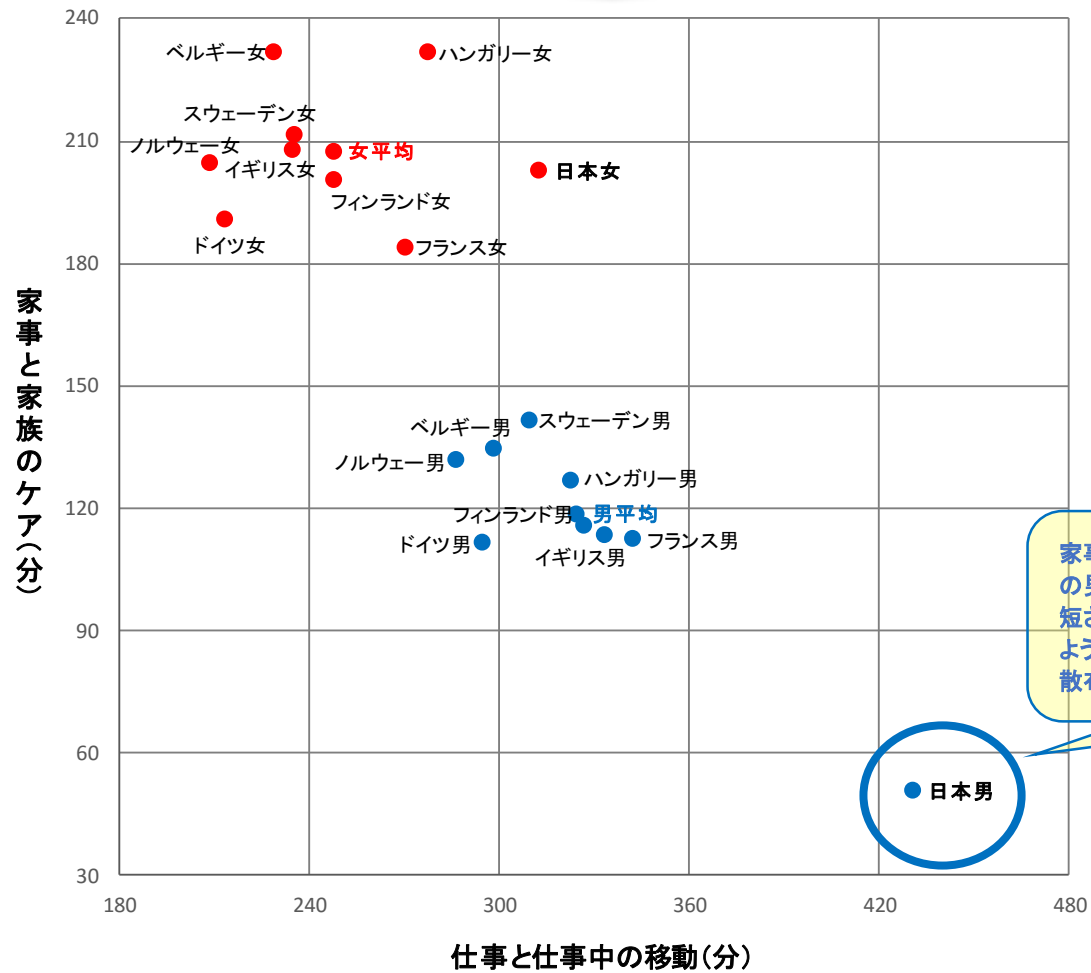


有業者【女】仕事時間の長い順



有業者の場合、男女とも、仕事時間とその他(自由時間等)がトレードオフの関係にあるように見える。各国とも仕事と家事の時間比率に男女差があるが、日本は特に著しい。

有業者の仕事と家事の時間の関係をみてみると・・・



家事時間と仕事時間はトレードオフの関係にある。日本の男女はよく働く。特に、仕事時間の長さ、家事時間の短さは、先進諸国の中でもとびぬけている。ようやく傾向が鮮明にみえるようになった。散布図は、項目間の関係を見るのに適している。

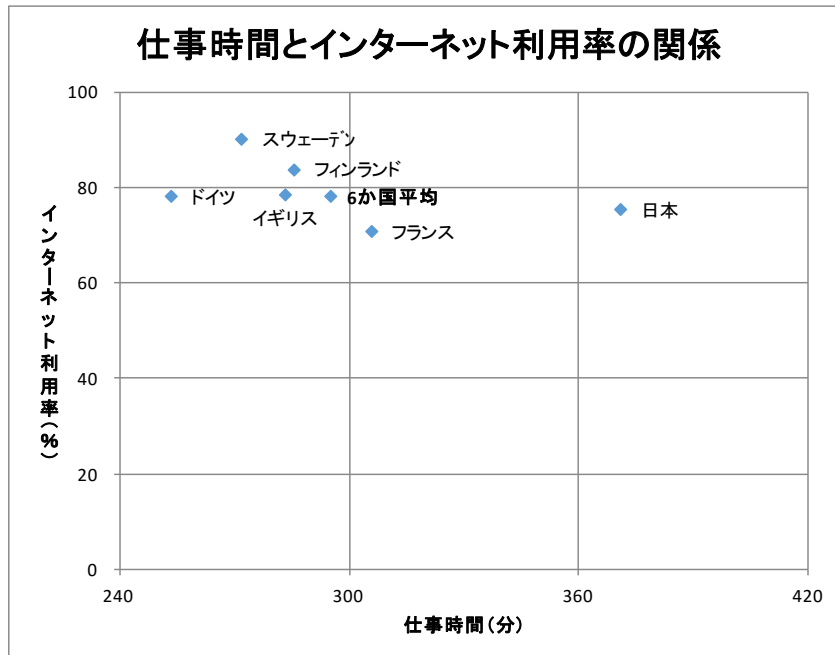
資料：「平成 23 年度社会生活基本調査」で国際比較のために国が作成した参考表
 ※定義づけや調査年度は国により異なる。「仕事と仕事中の移動」には「通勤時間」も含む。
 ※生活行動の区分については、社会生活基本調査の解説を参照（次ページ）

別表2 行動の種類の内容例示一覧

行動の種類	内容例示	備考
1 睡眠	夜間の睡眠 昼寝 仮眠 ベッドで眠りに落ちるのを待つ	・就寝から起床までの時間をいう。 ・うたたねは「13 休養・くつろぎ」とする。
2 身の回りの用事	洗顔 入浴 トイレ 身じたく 着替え 化粧 整髪 ひげそり 理美容室でのパーマ・カット エステ 巡回入浴サービスを利用した入浴	・自分のための用事をいう。 ・炊事、掃除、洗濯は「7 家事」とする。 ・介護サービスなどを利用して行う場合もここに含める。
3 食事	家庭での食事・飲食 外食店などでの食事・飲食 学校給食 仕事場での食事・飲食	・交際のための食事・飲食は「18 交際・つきあい」とする。 ・間食(おやつ)は「13 休養・くつろぎ」とする。
4 通勤・通学	自宅と仕事場の行き帰り 自宅と学校(各種学校・専修学校を含む)との行き帰り	・途中で寄り道をした場合も、ふだんの経路を大きくはずれない場合の移動の時間はここに含める。
5 仕事	通常の仕事 仕事の準備・後片付け 残業 自宅に持ち帰ってする仕事 アルバイト 内職 自家営業の手伝い 工作中的の移動	・本人または自家の収入を伴う仕事をいう。 ・休憩時間などのため仕事をしない時間は除く。 ・出張先への行き帰りの移動は「11 移動」とする。
6 学業	学校(小学・中学・高校・高専・短大・大学・大学院・予備校など)の授業や予習・復習・宿題 校内清掃 ホームルーム 家庭教師に習う 学園祭の準備	・必修科目として行うものでないクラブ活動・部活動はその内容により「15 趣味・娯楽」、または「16 スポーツ」などとする。 ・学習塾での勉強はここに含める。
7 家事	炊事 食事の後片付け 掃除 ゴミ捨て 洗濯 アイロン かけ つくろいもの ふとん干し 衣類の整理片付け 家族の身の回りの世話 家計簿の記入 株値のチェック・株式の売買 庭の草とり 銀行・市役所などの用事 車の手入れ 家具の修繕	・通勤・通学者などの送迎はここに含める。 ・自家消費用の作物の栽培などもここに含める。ただし、趣味として行っている場合は「15 趣味・娯楽」とする。 ・インターネットによる株値のチェック・株式の売買もここに含める。
8 介護・看護	家族・他の世帯にいる親族に対する日常生活における 入浴・トイレ・移動・食事などの手助け 看病	・一時的な病気などで寝ている家族に対する介護・看護もここに含める。 ・家族以外の人に対する無報酬の介護・看護は「17 ボランティア活動・社会参加活動」とする。
9 育児	乳幼児の世話 子供のつきそい 子供の勉強の相手 子供の遊びの相手 乳幼児の送迎 保護者会に出席	・子供の教育に関する行動を含む。 ・就学後の子供の身の回りの世話は「7 家事」とする。
10 買い物	食料品・日用品・電化製品・レジャー用品など各種の 買い物 ビデオのレンタル	・ウィンドーショッピング、インターネットによる買い物も含む。
11 移動 (通勤・通学を除く)	電車やバスに乗っている時間・待ち時間・乗換え時間 自動車に乗っている時間 歩いている時間	・「4 通勤・通学」以外の移動で、出発地から目的地までの時間をいう。
12 テレビ・ラジオ・ 新聞・雑誌	テレビ・ラジオの視聴 新聞・雑誌の講読 テレビから 録画したビデオを見る インターネットで新聞を読む	・テレビ(録画を含む)・ラジオ(録音を含む)・新聞・雑誌による学習は「14 学習・自己啓発・訓練(学業以外)」とする。 ・購入・レンタルなどによるビデオの視聴は「14 学習・自己啓発・訓練(学業以外)」または「15 趣味・娯楽」などとする。
13 休養・くつろぎ	家族との団らん 仕事場または学校の休憩時間 おやつ・ お茶の時間 食休み うたたね	・テレビ・ラジオなどを視聴しながらくつろいだ時間は「12 テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」とする。
14 学習・自己啓発 ・研究(学業以外)	学級・講座・教室 社会通信教育 テレビ・ラジオによる 学習 クラブ活動・部活動で行うパソコン学習など 自動車教習	・個人の自由時間に行う学習をいう。 ・職場で命ぜられて受けた研修は「5 仕事」とする。 ・学校の宿題の「自由研究」は「6 学業」とする。
15 趣味・娯楽	映画・美術・スポーツなどの観覧・鑑賞 観光地の見物 ドライブ ペットの世話 テレビゲーム 趣味としての 読書(漫画を含む) クラブ活動・部活動で行う楽器の演奏	・菓子作りなど、趣味として行っている場合はここに含める。
16 スポーツ	各種競技会 全身運動を伴う遊び 家庭での美容体操 クラブ活動・部活動で行う野球など(学生が授業などで 行うスポーツを除く) つり	・運動としての散歩を含む。ただし、特別の目的がある移動(職場に歩いて行く)は含めない。
17 ボランティア活動 ・社会参加活動	(ボランティア活動) 道路や公園の清掃 施設の慰問 点訳 手話 災害地など への援護物資の調達 献血 高齢者の日常生活の手助け 民生委員 子供会の世話 美術館ガイド リサイクル運動 交通安全運動 (社会参加活動) 労働運動 政治活動 布教活動 選挙の投票	・自分の所属する町内会・PTA・同業者団体のために行う世話はここに含める。 ・自分の所属する地域・団体で行うバザー、お祭り、運動会などへの単なる参加は「10 買い物」、「15 趣味・娯楽」、「16 スポーツ」などとする。
18 交際・付き合い	知人と飲食 冠婚葬祭 同窓会への出席・準備 あいさつ回り 見舞い 友達との電話・会話 手紙を書く	・交際のための趣味・娯楽、スポーツはそれぞれ「15 趣味・娯楽」、「16 スポーツ」とする。
19 受診・療養	病院での受診・治療 自宅での療養	
20 その他	求職活動 墓参り 仏壇を拝む 調査票を記入する	

ステップ3：項目間の関係分析（散布図をつくって各国の状況を比較しました）

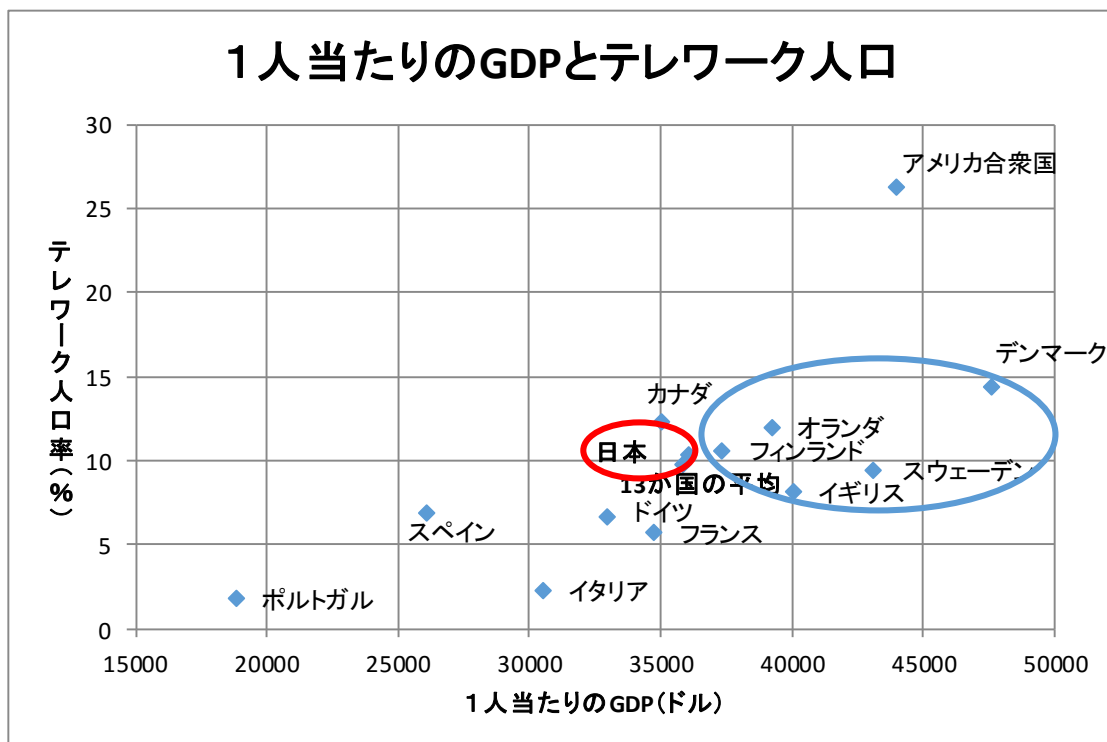
● 仕事時間（有職者男女計）×インターネット利用率



資料：仕事時間：「平成 23 年度社会生活基本調査」で国際比較のために国が作成した参考表より有職者男女計。インターネット利用率：「世界の統計 2015」（国が ITU, ICT Statistics Home Page 2015 年 1 月ダウンロード）

※国により、インターネット・サービス・プロバイダー加入者数に基づく推計値の場合がある。

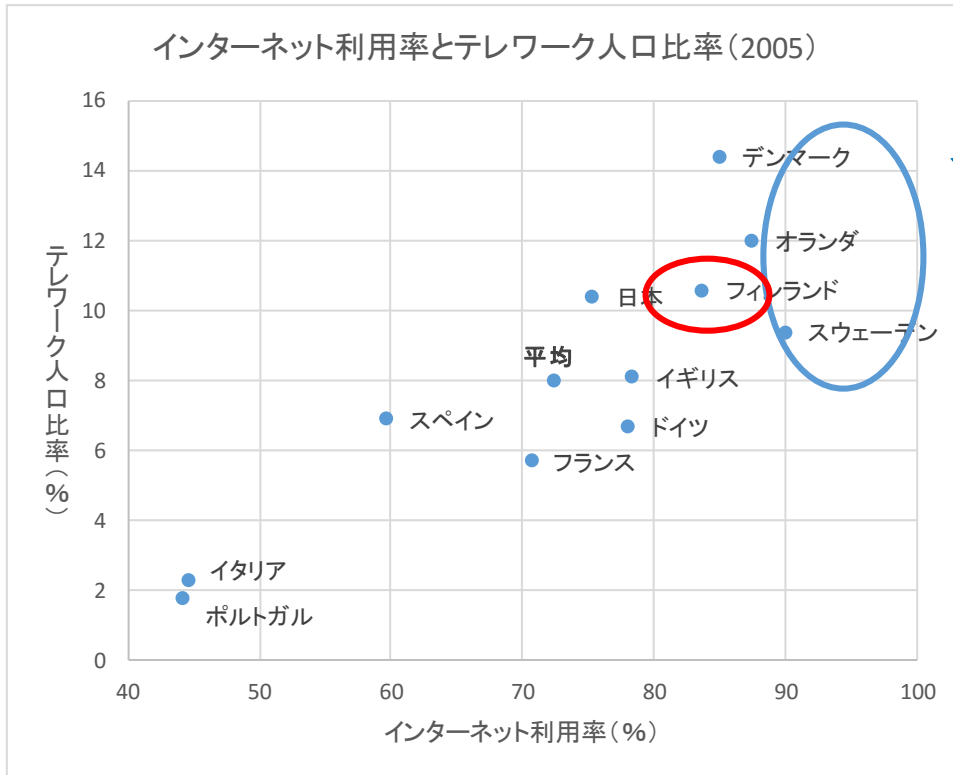
● 1人当たり名目 GDP×テレワーク人口比率（2005年）



資料：一人当たり GDP：国際貿易投資研究所「国際比較統計」（各国 2005 年名目 GDP）

テレワーク人口：日本テレワーク協会「世界のテレワーク」（2005 年、アメリカとカナダは 2007 年）

●インターネット利用率×テレワーク人口比率（2005）

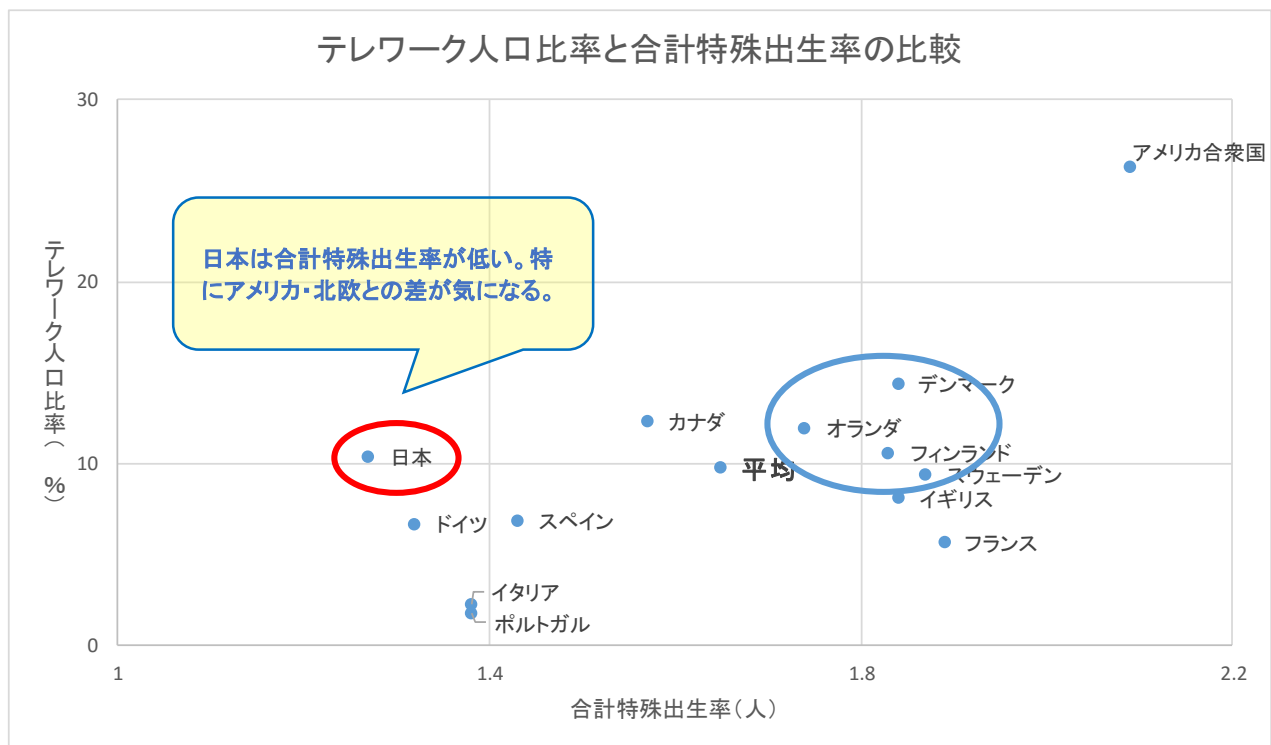


インターネット利用率とテレワーク人口比率には、きれいに正の相関がある(あった)。日本はいずれも比較対象国平均以上。

資料：インターネット利用率：「世界の統計 2015」（各国 2005 年）

テレワーク人口：日本テレワーク協会「世界のテレワーク」（2005 年、アメリカ・カナダは 2007 年）

●合計特殊出生率×レワーク人口比率

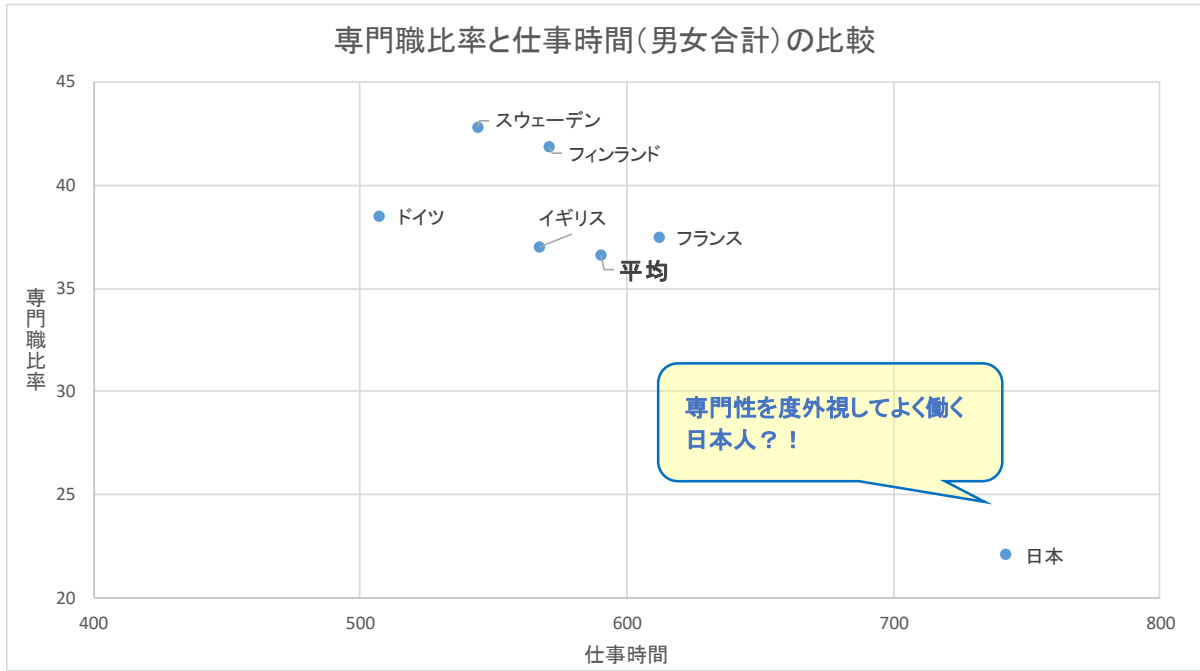


日本は合計特殊出生率が低い。特にアメリカ・北欧との差が気になる。

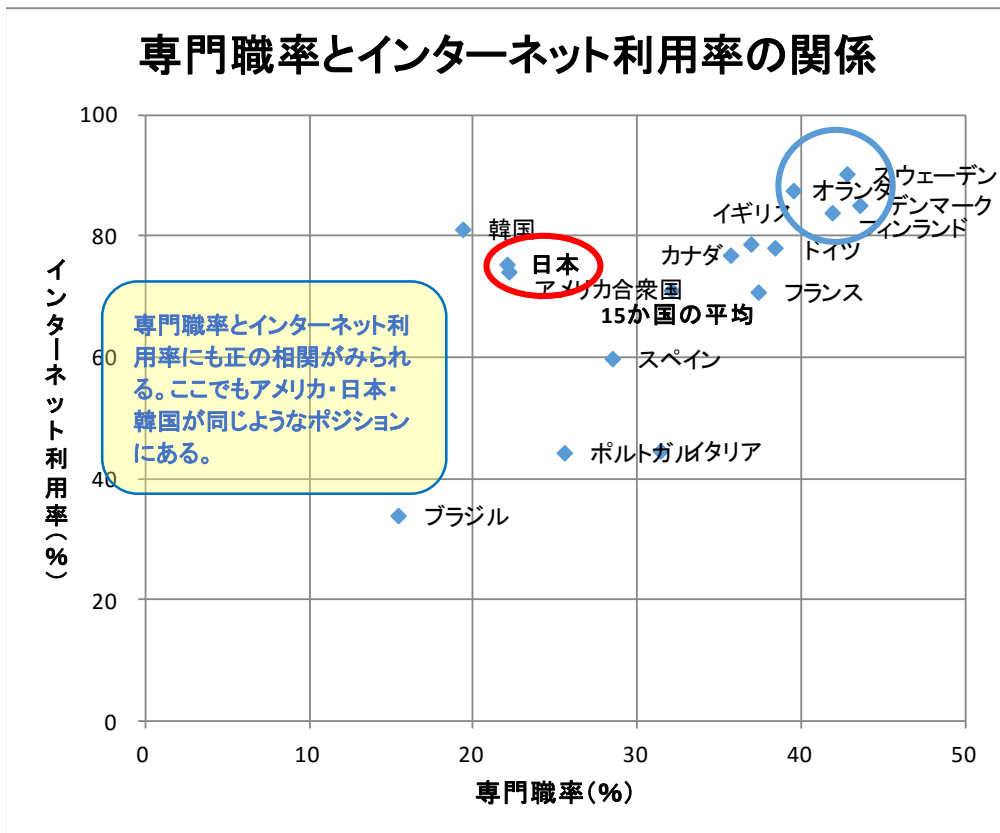
資料：合計特殊出生率：「世界の統計 2015」（2005～2010 年の平均）

テレワーク人口：日本テレワーク協会「世界のテレワーク」（2005 年、アメリカ・カナダは 2007 年）

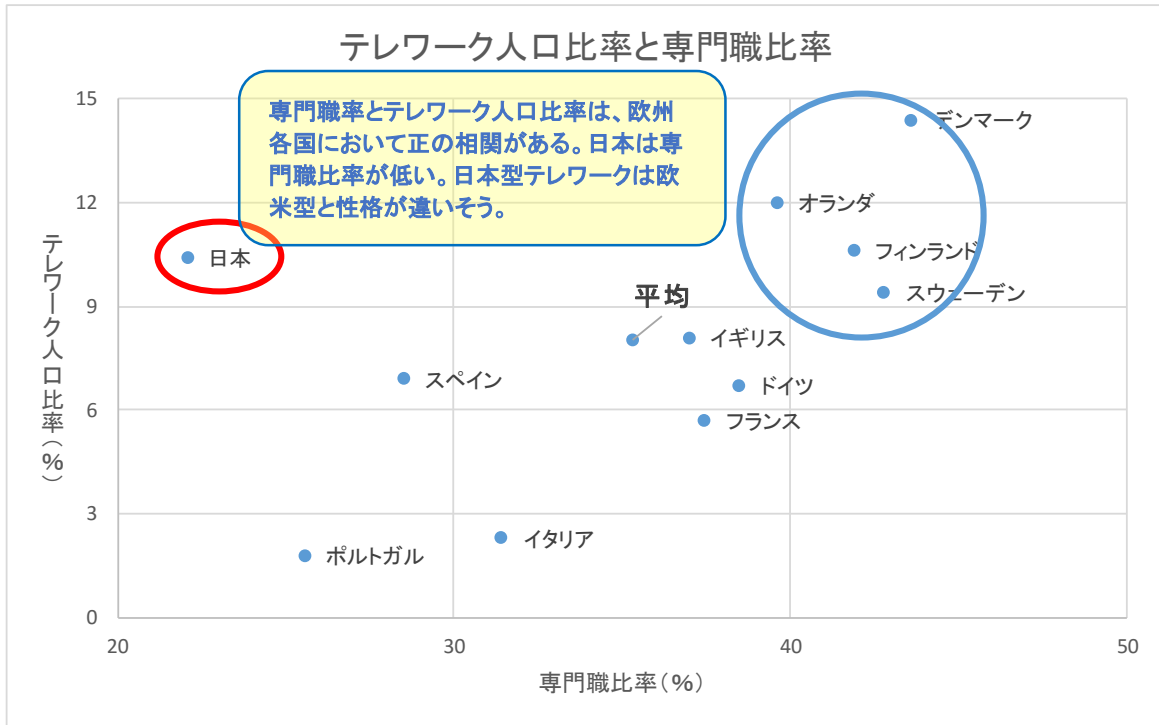
● 専門職比率 × 仕事時間



● 専門職比率 × インターネット利用率



● 専門職比率×テレワーク人口比率



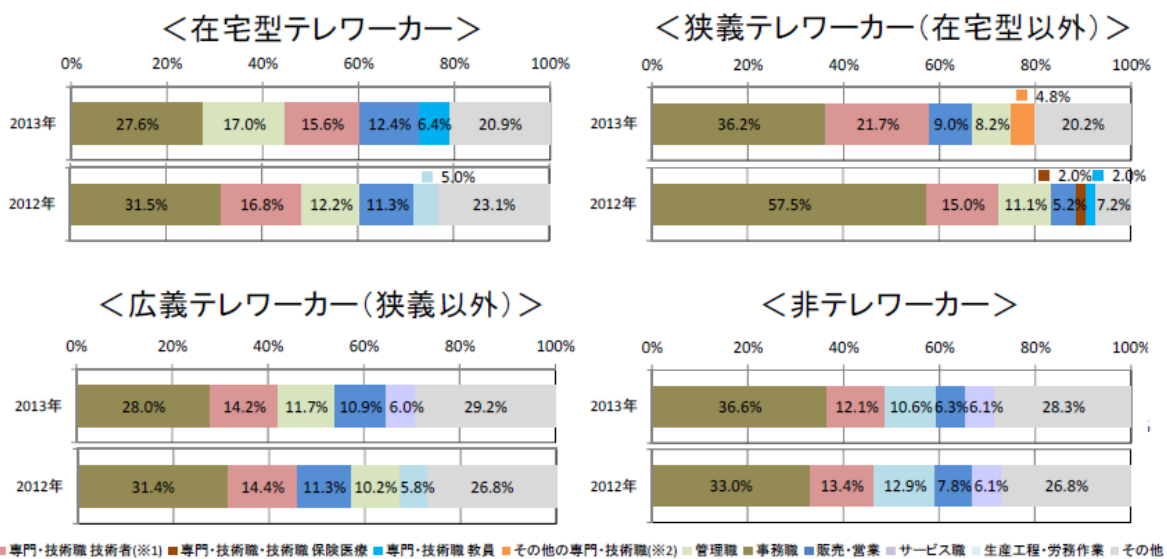
資料：専門職比率：「世界の統計 2015」（各国 2013 年、就業者数に占める専門職の比率）

テレワーク人口：日本テレワーク協会「世界のテレワーク事情」（2005 年、アメリカ・カナダ 2007 年）

【参考】雇用型テレワーカーの職種別人口構成

（国土交通省「平成 25 年度テレワーク人口実態調査」平成 26 年 3 月）

テレワーカーの職種構成をみると、日本では事務職や「その他」が高く、専門職が 1 割台で就業者平均以下。



※1 科学研究者、農林水産業・食品技術者、機械・電気技術者、鉱工業技術者、建築・土木・測量技術者、情報処理技術者など
 ※2 法務従事者、経営専門職業従事者、宗教家、文芸家・記者・編集者、美術家・写真家・デザイナー、音楽家・舞台芸術家など

(注)・数値は実態調査に基づくサンプルベースの雇用型・自営型別テレワーカー分類別職種別の割合であり、上位5職種のみを表示している。
 ・職種の種類は「日本標準職業分類(平成9年12月改定)」(総務省)に基づく。

(2) 結果の考察～データの「読み取り」から「提案」がうまれました～

①作業過程でのディスカッションより

- 一連の作業を通じて、チームの全員が、仕事時間と家事（家族のケアを含む）時間の関係や専門職比率において日本と欧州（特に北欧）との間に大きな違いがあることに衝撃を受けました。そして、情報化や経済成長力は高水準でも、働き方や生活のあり方は成熟したものになっていないのではないか、北欧諸国との違いはどこにあるのか、といった疑問が浮かび上がりました。
- 北欧諸国との違いについて、20年前のテレワーク国際比較研究では、「北欧では経済の単位が『個人』であるのに対し、日本では『事業所』や『世帯』となっている。このことが個人の輪郭をぼやかし、自立的なワークスタイル・ライフスタイル形成をはばむ要因になっているのではないか」と考えました。今回の作業を通じ、現在もその構造は変わっていないらしいことがわかりました。ワーク・ライフバランスに着目してさらに関連情報を検索してみたところ、フィンランドでは子育て支援の単位も個人で、父親・母親の別にはほぼ同等の手当てが支給されることもわかりました（出産への手当は母親だけ）。家族のケアが男女共通の義務と権利であることが、制度的にも保障されている社会のようです。
- 社会生活基本調査に掲載された有業者の生活時間比較データをさらに細目で見てみると、日本では男女とも欧州各国に比べて、「家事や家族のケア」に充てる時間が短く、自分の「身の回りの用事や食事」に充てる時間が長くなっています。学習とボランティアは、各国とも無業者に比して極端に短時間ですが、その中でも、欧州ではボランティア、日本では学習に充てる時間を多く取る傾向がみられます。自分のために時間を使う性向の強い日本人において、男女の家事時間の格差が女性の負担感をさらに強いものにしているのではないかと。チームでのディスカッションはさらに広がっていきました。

②この記録をとりまとめるにあたっての補足（掘越）

- 欧州各国では「仕事の源泉は個人の専門性であり、それを発揮し、つなげていくことで価値が生み出される」という構造がより明確で、日本では未だ明確でないようにみえます。日本は近代化を急ぐ中で、技術や労働力の結集を一部の資本力ある組織の力に委ねてきました。その後財閥解体が進んでも、大企業志向が続き「専門家」である以前に「企業人」としてどう振る舞うかが問われ続けています。テレワークは、自らの生産活動を自らマネジメントする働き方であり、専門職に馴染みやすい性格を持っていますが、日本の雇用型テレワーカーの職種をみると専門職は1割台にとどまり、事務職や「その他」の比率が高くなっています。事務職や「その他」の人々も、財務・会計、マネジメントといった分野の専門家であるはずですが、会社や個人は、それよりも「〇×（好きな企業名を入れて読んでください）マン」や「総合職」といった属性を重視しているのではないのでしょうか。
- テレワーク推進政策を積極的に推進している日本で、テレワークへの参加人口は近年頭打ちになっています。それは、いつでもどこでも専門性を発揮するというより、会社で社員としての力を発揮し、オフ時間には自分のために時間を使いたい日本人にとって、テレワークが実は辛いワークスタイルになっているからかもしれません。2012年に横浜男女共同参画センター横浜（フォーラム）との協働事業として実施した自主研究「自宅拠点型の働き方検証」では、自宅でテレワークしている人々のうち「常勤女性」で最もストレスが高くなっていることがわかりました。一方、最もストレスが低い（自宅で働くことをハッピーと感じている）人々は、専門性を武器に自宅で自営している男性でした。この人々は欧州型のワーク・ライフバランスを実践している人々であるともいえそうです。

③最終日のディスカッションより～考察から提案へ～

○体験の8回目では、これまでの作業結果をどう読むかについて意見交換を行いました。まとめにかえて、その概要を掲載します。

●グラフの読み取り

- ・デンマークが多くの項目で高位となっている。どんな国かもっと知りたい。
- ・日本は、情報化のみ他のテレワーク先進国と同水準だが、専門職比率、生活時間の配分など働き方関連の項目は大きく異なっている。テレワーク普及の条件にも違いがありそうだ。
- ・身近な人（技術系専門職）が過重労働とストレスで最近離職した。企業の労務管理のあり方そのものを見直す必要があるのではないか。
- ・日本の会社組織の中では、個人が、業務の全体像や、業務の中での自分の仕事の位置づけがわからない状況も多いのではないか。テレワークは、業務の全体像がわからないと仕事しにくい。テレワークチームは、社内の社員同士より積極的にコミュニケーションを取り合う傾向がある。
- ・日本や世界のテレワーカーの中の専門職の割合などをもっと調べてみたい。
- ・生きやすさの指標があるとよい。

●テレワーク推進に向けての提案

- ・専門職から重点的にテレワークを推進したらどうか。
- ・テレワークの効果を明らかにし、報酬に反映させたらどうか（通常の働き方より高くする）。
- ・テレワークは、自己管理とともにストレスマネジメント面での支援も重要。

(3) チームとしての成果

○今回の参加者は、「教授と相談して大学院での研究を自宅で行えるようにしてもらった」、「内部障害があり、体調と折り合う働き方としてテレワークに関心がある」という経験や関心を持って自主研究活動に取り組みました。データの整備では、表計算ソフトの活用テクニックや客観的なデータの分析手法の修得を重視しましたが、最終的には自らの経験や関心を視点に加え、より多角的な分析に取り組むことができました。8日間の積み上げは、「分析の経験はあるが、PCスキルを高めた」、「PCの勉強はしてきたが、分析の経験がない」という参加者にとって、その両方を鍛えるよい機会になったようです。

○TRI（堀越）としては、長年の課題としていた「テレワーク国際比較のフォローアップ」を大きく進めることができました。1998年当時の研究（報告書の概要版を別途添付）のデータ更新、視点の検証・補強とともに、散布図を作成するなどより丁寧な作業を行うことで、国際比較の結果をより鮮明に表現することができました。純粋にテーマオリエンテッドな研究を、チームとして進められたことは、TRIとしての大きな実績になったと考えています。

○今回の研究は、既存の統計データの加工分析を主眼とし、十分な成果を得ることができましたが、研究活動を通じて、TRIも参加者も「もっと研究を深めたい」と思うようになりました。特に、北欧と日本の男女について、年齢や家族構成、働き方を幾つかのパターンに分けて比較する研究ができればと考えています。既存の関連データや研究成果の読み取りに加え、仕事や生活のシーンの観察やインタビューなどの実査を行い、今後の日本人の生活と仕事のあり方を拓いていくための材料をつくれませんか。それを今後の課題としていきたいと思えます。

3. 職場体験としての成果

(1) 毎日の日誌より

○フォーラム南太田では、ガールズ講座修了者の社会体験において、体験日の後、参加者各自が「今日できたこと」「気づいたこと・改善点」等を日誌に記すようにしています。今回の体験もそれに遵ずることにしました。エクセル作業に慣れるため、日誌は、各自一枚のシートに毎回書き加えていく形式にしました。「今日できたこと」「気づいたこと・改善点」「その他」に、「目標」と「堀越からのコメント」の欄を加え、毎回の経過もみえるようにしました。日誌は、目標・実際の作業の進捗・次の具体的な作業の設計に大いに役立ちました。参加者の内省に対して受入側がコメントすることで、問題を解決しながら先に進むことができ、結果、スムーズな業務推進と参加者の納得につながっていったのではないかと思います。

○TRI（堀越）も同様に日誌をつけました。途中、記述内容が「①業務内容そのものに関する事項」「②参加者の自己観察・自己啓発に関する事項」「③職業体験受入プログラムのあり方に関する事項」に分かれていることに気づき、それぞれの文字色を着色して視覚的にも区分できるようにしました。そうしたところ、回を重ねるごとに、当初大きなウェイトを占めていた「参加者の自己観察・自己啓発に関する事項」が減っていき、「④業務内容そのものに関する事項」のウェイトがどんどん高まってきていることに気づきました。仕事が回るようになってきた証拠です。また、その3項目にまたがる事項として「チームワークに関する事項」があります。ここでは、その4項目ごとに、日誌を振り返ってみます。

①参加者の自己観察・自己啓発に関する事項

○参加者の記述は、当初、自己観察・自己啓発に関する内容が大きな比重を占めていました。目標に「相手が快く受け止められるような表現で伝えたい」「自分から話をする」を掲げるように、自分の欠点を克服していこうとする姿勢が強く見られました。それが内面的葛藤につながっているようでした。それぞれ課題意識は異なりますが、いずれも“人とのコミュニケーション”が上手にとれるようになることを第一の課題としているようでした。

○初回の日誌には「堀越さんと同じようにつついフランクになってしまった」「聞かれたことに答えたり話についていだけで精一杯だった」との記述がありました。しかし、受入側からみると2人とも適切に参加できており、特に問題は感じられませんでした。その後も、人との関わり方を反省する記述が毎回みられました。「作業に集中しすぎて反応がおろそかになった」「相手にお礼を言っただろうか」など。必要以上に内省的と思えるコメントは、最後まで見られました。「メモを取り忘れた」「メモをうまくとれなかった」という反省も二人の記述の中に散見されました。

○一方で、回が進むにつれて自己肯定的なコメントが増えてきました。「意見をはっきり言うことは自分の強み」「ミスや不足のないようにと思っていたが、わからないことやできないこと、間違えることを（自分で）認めてしまった方が楽になる」など。当初から「以前から認められている自分と自分の考える自分にギャップを感じている。自分を認める訓練も必要」といったコメントもみられ、訓練により克服していこうとする前向きな姿勢があることが大きな原動力となっていたようです。

②業務内容そのものに関する事項

- 多くの職場では、各自の内面的葛藤はさておき、一定の時間内に一定の成果を上げていくことが求められます。そして、業務が円滑に回るようになると、そのような内面的葛藤から脱皮していくことが多いように感じます。社会的課題（葛藤）を解きほぐしていくシンクタンク業務は、そんな回路づくりに有効ではないか。8回の体験で、具体的な作業をいかに進め、研究成果をいかに上げることができるか。その成果は、日誌の記述内容を示さずとも、P.7～19の作業結果が物語っています。
- この体験は、受入側の蓄積（経験）と、参加者の前向きさが二軸を成し、そこに実際の業務という肉付けをしていくという構造となっています。肉付けにあたっては、参加者の発言や質問を最大限生かすようにしました。実施に、参加者のコメントは、作表・作図の方法、分析の視点に価値を加え、作業環境（PCや椅子の配置等）の改善につながっていきました。
- 前向きな姿勢は、実際の作業で大いに発揮されました。Bさんは、各局面で作表・作図のテクニックを自主的に調べ、実演してくれました。それは、作業の効率化に貢献すると同時に、「認められている自分と自分の考える自分のギャップ」を自ら埋める機会にもなっていったことと思います。
- また、途中、データの誤記が発覚した時はチャンスと思いました。失敗は考察の親、失敗を転じて実を獲ることが重要なのです。おかげで、情報化が最も進んでいることがわかったフィンランドがどんな国なのか考察を進め、北欧社会と日本社会の違いについての整理が進むことになりました。
- なお、当初、自主研究以外の受託業務にも加わっていただく予定でしたが、水曜日の午後という限定した日時に合わせた作業段取りが難しく、実施には至りませんでした。但し、現在進行中の業務を差しさわりのない範囲で説明しました。また、体験時間中にも業務の電話を受けるなど、できるだけ実際の仕事の場面に触れられるようにしました。

③職業体験受入プログラムのあり方に関する事項

- 社会体験Ⅱは、参加者にとっては実践に近いジョブトレーニングの機会であり、TRIにとってはCSRであるとともに自主研究を進め、シンクタンク人材を育成する機会という位置付けにあります。フォーラム南太田の「めぐカフェ体験Ⅱ」に近いので、受入にあたっての約束事や日誌といった基本的なフォームはこれに従いました。
- しかし、民間事業者が自宅兼事業所で受け入れる際の留意事項、報酬や傷害保険のことも含め、受入のあり方について市内・県内の若者就労支援機関に相談しましたが、ノウハウ情報の獲得には至りませんでした。参加者への報酬なし・交通費も自己負担というプログラムがあるとのことでしたが、出口に近い就労準備トレーニングであるからには交通費や報酬を支払うことが必須と考え、制度利用はせず自主事業を貫くことにしました。その経緯は、参加者にも報告しました。
- ちなみに、時給千円から研修費を半分いただくという考え方で1時間当たり500円換算の手当と交通費（実費）を支給、保険は若者就労支援機関の方から保険会社と担当者、概算の保険料等を教えていただきましたが、8回という回数に対して高額に感じ、何かあったら相談しようということにし、結局最後まで導入しませんでした。この件は、今後の課題として残されています。
- 修了証は、参加者の希望もあり、発行することにしました。

④チームワークに関する事項

○この体験では、短期間でも（短期間だからこそ）、参加者がチームワークを通じて自信と達成感を得ていくことが最大の肝になるだろうと考えました。得意分野もキャラクターも異なる2人の力を組み合わせ、どうチームワークをつくっていくかは未知数でしたが、2人の前向きさを信じることにしました。チームワークに関して受入側がしてきたことは次のことのみです。

- ・最初に「3人のチームでやる」ことを強く宣言
- ・具体的な作業は2人に任せる
- ・休憩時間にお茶と雑談を楽しむ

○参加者の初回の日誌には、「6人のチームから3人のチームになり、ひとりにかかるウェイト（プレッシャー）が大きくなった気持ちもあるが、チームプレーであることを念頭に自分にできることをしよう」という記述がありました。当初は、年上で研究経験のあるAさんに対してBさんは気後れ気味だったように見えました。しかし、3回目には「研究面で自分が役に立てていないのではと不安だったが、行き帰りの途中でAさんにアドバイスをいただき『わからないなりの視点を持つ』ことで役に立ちたい、もちろん技術的な面では最善を尽くしたい」と書いています。

○もともとAさんは「グループの中で自分にできることは何かを考えるタイプ」と自認しています。そこにBさんの「自分から質問や意見を述べよう」とする努力が加わり、2人の姿勢の中でチームワークが機能しはじめるのにそれ程時間がかからなかったようです。途中から2人で相談して作業が進むようになり、後半の作業は「質問がある時以外、掘越はお呼びでない」流れとなっていきました。その姿は、傍で見ても実に気持ちのよいものでした。受入側は、プロジェクトの基本路線を定め、作業の過程で必要なアドバイスをすればよく、自分の持てる知恵は惜しみなく差し出し、必要な作業は信頼して遠慮なく2人に投げかけるという役回りで、2人の進歩を楽しみながら、楽もさせてもらうことができたのです。

(2) 目標達成状況

○8回目に、それぞれが立てた目標の達成状況を評価するディスカッションを行いました。自己評価と相互のディスカッションを通じた結果を整理すると、次の通りです。

参加者 A

【凡例】◎印：目標以上の水準に到達、○印：まあまあ水準、△印：目標達成に至らず

体験の目標	評価（自己評価とディスカッションの結果）
<ul style="list-style-type: none"> ●エクセルの並び替え機能等が使えるようにしたい。 ●自分の混沌とした人生を納得できるように将来設計してみたい。 ●作業への参加姿勢について <ul style="list-style-type: none"> ・意見や感想を適切に相手が快く受け止められるような表現で伝えられるようにしたい。 ・たまに集中力が乱れるので、目の前の事に意識をもっていけるようにしたい。 	<p>◎並び替え機能だけでなく、様々なスタイルのグラフの作成もできるようになった。</p> <p>△設計には至らなかったが、結婚か仕事か二者択一する必要はない。変化もよしとしよう。</p> <p>○率直な表現は、よいのではないかと。少なくともシンクタンク業務ではプラス要因。集中力の乱れは、体験中は問題が感じられなかったが、今後とも努力。</p>

参加者 B

体験の目標	評価（自己評価とディスカッションの結果）
<ul style="list-style-type: none"> ●数値をデータ化する（自分でゼロから考えて表やグラフに作りあげる）手法を学ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> ・勉強と資格取得のための訓練はしてきたが、それをどう作業に役立てるかを実感・実践する。 ●作業への参加姿勢について <ul style="list-style-type: none"> ・自分から積極的に質問や意見を述べる。 ・自分を認めていく訓練をする。 	<p>◎元データから、様々なパターンで必要な計算や作図をした。作業に必要な方法を事前に調べて実演するなど、チームに貢献した。</p> <p>○自分の意見や質問を出しやすくなった。自分を認めることに前向きになれた。表情も豊かになってきた。</p>

受入側

体験の目標	評価（自己評価とディスカッションの結果）
<ul style="list-style-type: none"> ●自主研究活動：テレワーク国際比較調査のフォローアップ（主要指標の国際比較を通じた、柔軟な働き方の成立条件の仮説的整理）をチームで進め、成果をまとめる。 <ol style="list-style-type: none"> ①仮説を立て、検証に必要な作業を設計 ②調査・分析作業の実施 ③成果のとりまとめ ●TRIの受託業務を適宜体験し、実際の仕事のさばき方への理解が進められるようにする。 <ol style="list-style-type: none"> ①エクセル入力とグラフ化 ②テーマに沿った情報検索 ●以上を、「体験参加者個々のスキルアップ」と「TRI業務の効率化」の双方にむすびつける。 	<p>◎思った以上の結果を得ることができた。</p> <p>△受託業務への参加機会はつくれなかったが、説明により理解が進んだ。</p> <p>○手応えはある。業務の効率化の検証は今後の課題。</p>

(3) 参加者の体験レポート

8回の社会体験を終えて考えた私が仕事をする上で必要な条件

前回3回の社会体験を経て実施された8回の社会体験で考え感じた、テレワークという切り口から見た自分の将来についての考えをまとめたい。

ここから先は、各国の有業者の生活時間（特に仕事時間と家事時間）を分析した体験に基づき、今後、自らが健康で文化的な生活を送るのに必要な条件を予測してみた、個人的なレポートである。

まず、この社会体験に参加した前提として、私の生活時間には以下の特徴があった。①病氣療養後のリハビリ過程にあり、疲れやすく長時間にわたる作業は厳しい。②将来的には家事時間が増える可能性がある。①は健康関連の特徴であり、②は自立した人が抱える（特に結婚後は女性）特徴である。二つの特徴をカバーしつつ私が仕事をするならば、テレワークは選択肢として有力であると考えた。

テレワークは、物理的に時間に拘束されるような働きが求められる現代主流の生活スタイルではなく、気持ち良く働ける時間帯を選んで働くことでより一層クリエイティブな労働へと繋がる働き方である。これはテレワークのメリットであるだろう。具体的には、仕事の合間に昼寝を挟むことなどもできる（昼寝の効能は科学的にも認められつつあり、静養室が設けられている企業もある。しかし、静養室のキャパシティには限度があり、衛生面のメンテナンスもかかり、なんといっても自宅の寝床と比べれば違和感がある。自宅で行うテレワークではこの部分をクリアできる可能性がある）。しっかり休憩をとって、頭を冴えわたらせることができれば仕事の効率は上がるであろう。私自身、社会体験の過程で、夕食や家事などを挟んで自宅で課題（社会体験ではテレワーク的に自宅でも若干の作業をした）に取り組んだところ、統計表のグラフの単位の表記に間違いがあることに気づいたことがある。長時間労働では見過ごしがちなミスも、区切りながら取り組む作業の中で視点がクリアになり、連続的な作業では見つけにくいミスが発見されたという可能性が高い。断片的な労働は長時間の労働とは異なるメリットがあることが示されたともいえるだろう。

しかし、テレワークには現時点で課題もある。主体的に生活時間をコントロールできる人にしか向いていないという点だ。健康状態が万全でない人にも可能な仕事スタイルであると先ほど述べたが、いかなる人も体調が良好な時がずっと続くとは限らず、業務遂行力に波が生じることもあるだろう。その部分を見落とすと仕事も健康も破たんしてしまうこともありえる。これを最小限にとどめるためには、第三者がストップをかける必要もある。

以上より、テレワークは病氣を経験した私にとって自分の人生のドアを開く鍵の一つのようなものである。ドアを開けば新しい世界が始まる。もちろん、そのドアに固執しなくても別のドアと鍵があるかもしれない。それでも、働くという世間と接点が生まれる大きなドアを開く大事な鍵であることには違いない。自分の選択肢を広げる手段というのはそういうものではないか。とても貴重な体験をすることができたこと、社会体験に携わってくださった方すべてにお礼申し上げます。

(参加者A)

TRI 社会体験Ⅱを終えて

私が TRI 社会体験に参加したいと考えたきっかけは、テレワークのように「自宅で仕事をする」という働き方に興味があり、自分が「働く」ということを具体的に考えた時、選択肢のひとつにできるのだろうか、と思ったことにあります。私には持病があり、現在の自分の身体で無理なく仕事をしていく上で、将来的に自宅で作業を行える仕事に就けたら、と考えたことがありました。また、就業経験がないせいか、長期にわたって仕事のために一定の場所に通い続けることや、実際行われる業務の内容、職場に馴染んでいくということに明確なイメージを持たず、自信も持てなかった私にとって、主に在宅勤務を中心に「働き方」や「自分らしい生活のしかた」というテーマを考えていく場で社会体験をさせていただけたことは、とても貴重な経験でした。

今回、週1日×8回（Iも含めて11回）の社会体験の中で、少々遠方への移動を定期的に続けましたが、慣れていけばあまり苦にならず、少なくとも週1回という頻度では問題なく通える範囲であり、工夫次第であるように思えました。また、実地での業務に関しては、PCでの業務が中心ではあっても、やはり人とのコミュニケーションは不可欠であり、互いに苦手な部分を補いあうチームでの連携や、ディスカッション等で自分の意見をきちんと伝えることが大切であると実感しました。それと同時に、自分の課題であった「コミュニケーションが苦手」という意識が、経験不足や不慣れから来る意識だったということがよくわかりました。回を経る毎に場に慣れていき、最初は引け目を感じていた発言がスムーズにできるようになっていったことには、自分でも驚くばかりでした。しかし、これは私の変化というだけではなく、堀越さんがそのように場を作ってくださっていたからこそそのものだと考えています。短期間の体験でしたが、その中で、発言や行動をしよう、できると思える雰囲気が TRI にあり、思い切ってやらせてもらえたことの結果です。ここで得た、「私はどうやらやれているらしい」という実感が、次のステップに進むために必要なものなのだと思います。

社会体験を通じて、自分が仕事をしていく上で最も必要とするものは「持病がある人への配慮」であり、週何日、何時間働くかは、段階的に身体を慣らしながらステップアップし、最終的に自分に合ったペースを手探りで探るのが良いのではないかと思に至りました。また、テレワークという働き方が自分に出来るかという点に関しては、「私生活と仕事の区切りをしっかりとつける等の自己管理（ストレスマネジメント）が出来れば可能」と考えました。しかし、最も重要なのは、やはり下地になる社会経験であり、今の私にはそれが決定的に足りません。将来どのような働き方をしていくにせよ、これから、自分に自信が持てるようなしっかりとした地盤を作っていきたいと思います。

今回、このような機会を与えてくださいました堀越さん、フォーラム南太田の小田さん、小園さんに、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(参加者B)

(4) フォーラム南太田から参加者へ

A さんへ

先日終了した連続の社会参加体験、おつかれさまでした。

フォーラムのイベントボランティアでの出会いをきっかけに堀越さんがご提案くださり、実現した今回の体験でしたが、

堀越さんの温かさと、ガールズ修了者のみなさんへの信頼、そして A さんをはじめとする修了者の方たちの熱心な参加によってこれほどまでに濃く深い体験現場となりました。

A さんとお話ししたのは、今年 4 月にガールズ講座説明会で体験談をお願いしたときが最初だったと思います。事前に送ってくださった体験談の原稿の組み立てがすばらしく、またその後の進行についてのやりとりをするうちに、非常に頭の中が整理された、聡明な方だなあという印象を持ちました。

5 月末、堀越さんのお宅での現場説明会に同行した際には調査・研究に関心があると話されていた通り、堀越さんへの質問も一歩先をいくものであったことを覚えています。体験の現場でもきっと率先して意見を出し、次々と作業を進めていかれたのではないのでしょうか？

体験の期間中には、私も堀越さんとお話ししたり、振り返りの報告をいただく機会があったのですが、その中で A さんは課題を見つける力が優れていること、見つけるだけでなくそれを解決・改善する方法を同時進行で考えられていること、さらにはその改善案を相手（周り）に提案できることがわかり、それは素晴らしい力だと感じていました。

ご自身ではあまり意識されていないかもしれませんが、春の体験談の事前やりとりの中でも、私が感じていたことです。

得意&関心のある分野で今後活躍していけるといいですね。

後半の 2 人になってからの期間では、堀越さんとの会話も、B さんとの会話も増えたと思いますが、それによってご自身を見つめたり、他人との違いを知って自分のよさが見えたり、自分が思う自分と人から見た自分が違うことも、経験されたのではないのでしょうか。

体調も管理されつつ、みごと全回参加され、いろいろなことを吸収されたと思います。これからもご自身のよさをどうぞ大事になさってくださいね。

修了、おめでとうございます！

フォーラム南太田（男女共同参画センター横浜南）

小田 美子

Bさんへ

連続の社会参加体験、おつかれさまでした。

フォーラムのイベントボランティア応募の時には、まさかこの夏の連続社会体験にまでつながるとはご自身も想像していなかったと思いますが、これもタイミング。Bさんがつかんだチャンスなのだと感じています。

5月末、堀越さんのお宅での現場説明会に同行しましたが、そのときのBさんの印象は、おだやかで、人の輪に自然に入っていらっしゃる方、いい意味で一步ひいて全体を見ている方、というものでした。

でもBさんが書かれた体験の振り返りのなかでは「私は場になれるのが遅いほう」「意見を言ったけれども必死だったせいかあまり覚えていない」などあって、こちらが感じた印象とご本人の思いは違うものだなあと感じたことを覚えています。

後半、2人になってからは、堀越さんが、堀越さんも含めた「3人チームで」とよくおっしゃっていましたよね。(ずっこけチームでやっていこう、と・・・(笑))

毎週、それも8回も通うことで、堀越さんはもちろん、Aさんと話す機会も当然増え、そのことによってご自身を見つめたり、他人との違いを知って自分のよさが見えたり、自分が思う自分と人から見た自分が違うことも、経験されたのではないのでしょうか？

今回の調査事務という分野では、Bさんの持つパソコンの知識がとても役立ったのですよね。堀越さんからも「とても心強い」と伺っていました。

どこにいても、そういう自分の得意分野がちらっと現れたときには、ぜひ遠慮せずに行っている力を存分に発揮してください。たとえばボランティアの場面や何かの集まりの中でも、「それができる方なら」と仕事に発展することだってあるかもしれませんし、仕事についてからも、新たな業務やステップアップにつながる可能性があると思います。

Bさんが、体験中のご自身の発言について、後できちんと調べて補足したというエピソードも、今のことだけを見るのではなく、振り返ること、先を見ることができるとあり、また誠実な人であることが表れていると思いました。

遠方から通っていらしたけれど体調も管理されつつ、みごと全回参加され、いろいろなことを吸収されたことと思います。

これからもご自身のよさをどうぞ大事になさってくださいね。

修了、おめでとうございます！

フォーラム南太田（男女共同参画センター横浜南）

小田 美子

4. 結び

フォーラム南太田から、この事業に寄せて

フォーラム南太田（男女共同参画センター横浜南）

小園 弥生

4月にこの事業のタネのようなお話をいただいたとき、まず漠とした段階で、金沢区の風光明媚な現地に出向き、これまでのフォーラム南太田の社会参加体験事業の方法と目的、対象者についてお話しし、お互いにできそうなことについて話し合いました。それから、さすがシンクタンク！着々とスキームがつくれ（P.1）、「社会体験から就労体験へ」と発展するしっかりした構造をもった人材育成プログラムができていきました。経過についてはP.4-5にまとめられている通りです。

若い女性の支援を行うフォーラム南太田としては、「ガールズ編 しごと準備講座」後の社会参加体験として、入口となる数々のイベント体験、その次に定期的に家を出て活動に参加する中で役割を持っていく体験の受け皿ができてつありました。そこで、さらに就労に近い体験がめぐカフェ以外のメニューでも必要なときに、信頼性高く充実した場をいただくことができました。心より感謝申し上げます。

かたちになったプログラムをふりかえてみると、その特長は、就労により近いトレーニングであり、PCなどの事務スキルが向上し、研究の一端にかかわって世界が広がり、社会に踏み出す気持ちが高まることのように見られます。そこに受け入れ側の堀越さんとの研究から人生哲学、仕事への心構えに至るまでの奥深い対話もれなくついており、その包容力とあいまって、若い女性たちの本来の力を引き出す人材育成に成功されたのではないのでしょうか。

伴走させていただく中で、一回ずつ課題を設定し、ふりかえり、対話するといったきめ細かい対応は、かつては新人教育としてどの職場でも行われていたことではないかと思いました。私自身もかつてそうやって育ててもらったように思います。それが「即戦力」などと言われるようになり、人を待てなくなった社会のなかで若い世代の力が発揮できなくなっているのではないか。裏返しのように、TRIでいていねいに考えられた中で体験をした女性たちはみな、着実に自分の適性と力と場所を見つけ、歩きだしています。

若い人たちをゆっくり見守り、葛藤を支え、地域社会とともに葛藤できるネットワークをこれからも広げていけたらと思います。TRIを頼りにしています！

「自分のやりたいこと」を大切に行動していきましょう

株式会社ティーアールアイ

堀越 久代

参加者の2人は無遅刻無欠席で、日誌もすべて次回までに提出できていました。何より2人が来る水曜日も、その後に送信されてくる日誌も楽しみでした。8回目、今後も機会があれば一緒に研究の続きをしましょうと話しましたが、実現したいですね。

TRI 社会体験 I で一緒にした5人の縁、初夏に出会い、シンクタンクミニ講座に参加してくれたガールズ講座修了生の一人ひとりとのご縁も大切に思っています。今後とも、フォーラム南太田を要とするネットワークを大切にしていければと思います。

TRI で一緒にした方々が、仕事に就きはじめていると聞くことが、どんなにうれしいことか。弊社での体験を堂々と履歴書に書けるよう、私も精進していかなければと思います。

若いみなさまが、「自分のやりたいこと」を大事に、できれば生活も仕事も充実させながら、社会の中で自分らしく生きていけるよう、応援しています。やりたいこと、得意なことは様々だと思います。自分の心の声に耳を傾け、自分が心地よくなることを大切にしてください。

フォーラム南太田で、この12月に社会体験受入者同士の懇親会をはじめ開いてくださるとのこと、楽しみにしています。TRI では、できれば同様の人材育成プログラムを来年も続けたいと考えていますが、他にも様々な体験機会が広がっていくといいですね。若い人たちを応援する「おばちゃんネットワーク」をつくっていければ。フォーラム南太田のみなさま、よろしくお祈りします。

TRI では、実際の仕事でもみなさんとのつながりをつくっていければとも考えています。現在、外注という形で、ガールズ講座修了生の方と仕事を一緒にいただく機会を少しずつ増やしていこうとしているところです。それは、弊社の事業を充実していくということでもあるのです。

そして、テレワーク研究の発展形も実施できるよう、何かしら行動していきますよ。みなさまも前向きな行動を続けてください。その先に、きっと道が開けてきます。

最後に、この体験で参加者と受入側に寄り添い、常に伴走してくださったフォーラム南太田のみなさま、清々しくも前向きな姿勢で参加してくださったガールズ講座修了生のみなさま、参加者の背中を押してくださったご家族のみなさま、ありがとうございました。お疲れ様でした。

また、この試みを廣い心で見守り、家の掃除にも協力してくれた弊社社長と家族にも感謝しています。これからも、前進していきましょう。よろしくお祈りいたします。

(T R I 社会体験「研究業務支援体験」参加者：ハンドルネーム)

ガールズ講座第 7 期修了 椿 (つばき)

ガールズ講座第 12 期修了 A・T

(T R I 社会体験「研究業務支援体験」受入者)

株式会社ティーアールアイ 堀越 久代

“ガールズ”の皆様の前進と、就労体験受入ネットワークの充実を願って

2015 年 11 月